

近世の日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用

——近年の成果をふまえた展望——

The utilization of early modern maps produced in Japan by contemporary European cartographers

小林 茂*・鳴海 邦匡**

KOBAYASHI Shigeru and NARUMI Kunitada

Summary

Japanese early modern maps were reproduced by contemporary European cartographers to approach the geography of Japan. However, they have not been studied comprehensively. The purposes of this paper are to review them and find those on which little is known. As a result, the appearance of the maps of Japan by Sekisui Nagakubo published since 1779 made a remarkable change in the use of Japanese maps. Before his maps, diagrammatic maps of Japan such as those by Ryusen Ishikawa were reproduced repeatedly as exotic illustrations. In contrast, those by Sekisui Nagakubo and the other new maps were scrutinized by European navigators and cartographers. Especially, the Russian navigator von Krusenstern revised maps of Sekisui Nagakubo comparing with the hydrographic data from European ships and compiled a new map of Japan with place names transliterated by the Dutch diplomat, Titsingh, and revised by the German orientalist, Klapproth.

キーワード：日本 (Japan)、近世絵図 (Early modern maps)、複製 (Reproduction)、ヨーロッパ (Europe)、地図作製者 (Cartographers)

1. はじめに

ヨーロッパから鎖国期の日本に導入された地図や地理情報の役割については、これまでの地図学史の研究でよく知られている。とくに蘭学の興隆にともなって輸入され、利用された地図や地球儀については、詳細な研究が行われてきた（船越 1986；海野 2003；川村 2003）。なかでも「新訂萬國全圖」作製に際し高橋景保（1875-1829）が参照した、イギリスの地図製作者アロースミス（Aaron Arrowsmith, 1750-1823）による世界図については、彼の作製した同種の多数の図のどれに該当するかについて多くの研究者が関心を寄せることになった。蘆田（1930a）以降、室賀（1972）、海野（1977）、船越（1979）と検討が積み重ねられ、船越（1992）による再論のほか、その結論に沿いつつ自己の所蔵図を検討した二宮（2007）もみられる。また上原・小野（1969）は、上記アロースミスの世界図に関する重要資料を提示した。

類似の関心はロシアの使節レザノフ（Nikolai Petrovič Rezanov, 1764-1807）の来航時に、日本側に贈与したロシア帝国図に関しても見られる。鮎澤（1952；1962）以降、船越（1992；1996）の検討を経て、吉田（2009）が刊年な

どを確認している。

この傾向は、「洋学史」といわれるような、西欧の学術の影響を重視する研究分野と関心を共有する。上記の例は、日本人研究者が自国における地理的知識の発達過程に強い関心を寄せてきたことを示している。

これに対して日本で作製されて西欧に流出し、利用された絵図については、ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）やシーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866）の持ち出した図の一部に関心が集中している。ケンペルについては、その持ち出した日本図から編集され、著書『日本史』（Kaempfer 1727）に付載された日本図の系統をひく図（後掲の図 2 参照）がしばしば引用されている（三好・小野田 2004: 58；藤井 2009 など）。またシーボルトの場合は、秘密裏に持ち出した伊能忠敬らによる日本図の利用に関心が寄せられてきた（蘆田・箭内 1938；青山 2018 など）。この図の持ち出しは有名な「シーボルト事件」、さらにそれによる高橋景保の獄死にもかかわり、多角的に検討されてきたわけである。ただし最近になって、小野寺ほか編（2016）によって、シーボルトの持ち出した多くの日本製図（ライデン大学図書館蔵）が紹介されたのは、当時のヨーロッパにおける利用とい

*元大阪観光大学国際交流学部／人文地理学

**甲南大学文学部／歴史地理学

うよりは、そのコレクションの近世絵図資料のソースとしての役割を重視してのことであろう。

他方それ以外になると、後述する長久保赤水（1717-1801）の「改正日本輿地路程全圖」の場合のように、海外で重要な役割を果たしながらも十分な検討が行われていなかった場合がみられた（小林・鳴海 2018; 小林ほか編 2019）。この背景としては、すでに指摘した日本人研究者の洋学史的関心以外にも触れておくべき事情があるが、その検討にうつるまえに、西欧における日本図の研究について触れておかなければならない。

ヨーロッパで作製された日本図については、Teleki（1909）や Dahlgren（1911）によって早くから研究が始められた。その一部については日本で作製された図を元図にしていることが指摘されていたが、関心はおもに鎖国以前のものに集中していた。またそうした関心に呼応しつつ、日本人研究者によって戦前からヨーロッパの図書館での調査をもとにした研究発表が行われたが（Ishida 1938; Nakamura 1939）、いずれも 16 世紀末作製の行基図系日本図に注目した。行基図の系統をひく図と、この時期のヨーロッパ製日本図との関係が重視されたわけである。この時期にはまた、有名なオルテリウス（Abraham Ortelius 1527-1598）の『世界の舞台』（1570 年初刊）の 1595 年版に掲載された Luis Teixeira（生没年不明）の日本図（Iaponiae Insulae Descriptio）に、唐招提寺蔵「南瞻部州大日本國正統圖」と一致する要素が見られるといった重要な発見もあった（蘆田 1930b）。

第二次大戦後になっても中村（1966; 1967）の大部な書物、さらには Campbell（1967）によるヨーロッパ製日本図の紹介などに見られるようにこの傾向は続き、国内の海野（1985b）、高橋（1985; 1987）でも同様である。ワルター編（1993）および Walter（ed.）（1993; 1994）のようなドイツ東洋文化研究協会の大部な図録でも、19 世紀までカバーするというが、18、19 世紀に関する解説はケンペルとシーボルトに関する言及にかぎられる。

ただしこれらの図録にみられる図版を通覧してみると、18 世紀以降になると、はっきりと元図となった日本製の図を確定できるものが増えることがわかる。とくに最近刊行された Hubbard（2012、ハバード[2018]はその和訳）の場合は、検討の下限を 1800 年と明記し、多くの図版で 18 世紀は少数の日本製の図の編集・複製がくり返して行われたことを示している。すでに紹介したケンペルの『日本史』に付載された日本図は、石川流宣（生没年不明）の日本図による図とともに、その対象となった。

早期の日本図に関心が集中するこのような傾向にどのような背景があるかは、今後の課題であるが、検討が 1800 年頃までに限られるのは、その時期にヨーロッパにおける日本製図の利用が大きな転機を迎えていたことが関連している。18 世紀末から西欧の探検船の日本近海への来航がつづき、この地域に関する西欧側の地理的知識の増大が開始されるだけでなく、日本国内でも長久保赤水の「改正日本輿地路程全圖」のような新型の図が登場し、西欧側の日本図や東アジア図の作製が大きく転換する。この転換を十分に理解するに際しては、西欧側におけるラペルーズ（John Francis Galaup de La Pérouse, 1741-1788）をはじめとする航海者やアロースミスのような海図作製者の活動をよく把握するとともに、元図を作成した日本側の地図製作者の活動から海外諸国との交渉過程まで、日本の近世資料の参照が不可欠である。西欧と日本の資料両者について、それぞれの所蔵機関での綿密な調査が要求されることになり、日本の研究者だけでなく、西欧側の研究者にとっても、この課題に合わせた作業を達成するには、かなりの努力が必要となるわけである。

以上のように、18 世紀末以降のヨーロッパにおける日本製図の大きな転換およびそれに対するアプローチ状況を確認して、日本側の研究者に話題をもどすと、西欧から日本への地理情報の流入を重視する洋学史的な視点だけでなく、とくに 18 世紀末からの日本から西欧への地理情報の流出にも関心を拡大する必要があることがあきらかである。ただしその場合、日本人研究者にとっては、流出した絵図やその引用文献が国内になく、従来は研究が容易でなかったという事情がまず思いうかぶ。本格的な研究に際しては、上記のように直接的な資料の参照にむけて海外の資料所蔵機関での調査が要請される。ただしそうした機会があったとしても、近年までは従来の洋学史型の研究視角から、まず日本に到来した地図や地理情報の原本の探索が優先されていたわけである。

半世紀以上前の中村（1968）の指摘から示唆を得て研究を進めるうちに、筆者らはこのような状況に気づき、とくに海外における長久保赤水の「改正日本輿地路程全圖」の利用について検討をすすめる、小林・鳴海（2018）、Narumi and Kobayashi（2019）としてその成果を発表するとともに、2019 年の国際地図学会東京大会にあわせて、茨城県の古河歴史博物館で「鎖国時代 海を渡った日本図」展を開催することとなった。これによって、従来は国内的視点だけから検討されてきた「改正日本輿地路程全圖」が、国際的な視野の中でも検討されるべきことを示すことができた。

この過程で、海外の諸機関では、所蔵する日本近世絵図のカタログ化やデジタル化が予想外に進んでおり、流出絵図の所在だけでなく、詳細な画像が検討できる場合も少なくないことを知ることになったのは、大きな励みであった。旧世代の研究者にはなかなか困難であった海外の図書館や文書館の書誌情報等の検索が、国内にしながら容易にでき、海外での調査を予想外に能率的に進めることができたわけである。上述の「鎖国時代 海を渡った日本図」展では、そうした便宜を活用し、国内にある実物資料の展示に、海外の図書館や文書館収蔵の絵図・地図類の画像のパネル展示を組み合わせ、従来では容易でなかった展示を実現できたと考えている。これは図録（小林ほか編 2019）にも反映された。

以上のような便宜や工夫によって、海外における「改正日本輿地路程全圖」の参照や引用をおもに追跡し、従来の研究で触れられていない事例を示すだけでなく、同図が 19 世紀前半の西欧における日本図の基本となったことを明示するに至った。これは同時期の海外における伊能忠敬らの日本図の役割を大きく評価する見方（藤井 2009; Yonemoto 2016）に対しても一定のインパクトがあると考えている（小林ほか編 2019: 78-79）。

他方、このような成果をもとに日本図以外の絵図にも視野を広げ、海外での引用例を検討してみたところ、予想外に多くの例がすでに報告されていることを知った。石川流宣の「萬國総界圖」のような世界図だけでなく、林子平（1738-1793）の『三國通覽圖説』の付図、さらには松前藩士、加藤肩吾（1762-1822）がアダム・ラクスマン（Adam Kirillovič Laksman, 1766-没年不詳）に与えた蝦夷と樺太の図まで、少数ではあるが、日本図といわれるものを越えて、ヨーロッパで検討されたことがあきらかになった。その役割はさまざまであるが、日本およびその周辺の海域に関するヨーロッパ側の強い関心を反映していることは明らかである。ただしこれらの報告はそれぞれが孤立しており、それらを通覧してみると、すでに一部触れたような重要な画期ともいえるものがみつき、それは日本側での地図作製の発展とかなりの程度まで同調することも確認された。

本稿では、以上のような地図学史的視角から海外に流出した図の参照や引用の研究をレビューし、各事例を二つの枠組みなかに位置づけたい。その一方は別々に取り上げられがちであった事例をクロノロジカルに配列するもので、その変化を検討する。他方は事例相互間の関連を把握し、それらが構成する関係性の枠のなかで各事例をみなおすことである。上記の諸例は、それぞれが孤立

するようにはみえながらも、意外な方面で相互に関連していたことがあきらかになりつつある。

とくに 1805-6 年のイルクーツクでの日本人漂流者、新蔵（伊勢出身、1758-1810）とドイツ出身の言語学者クラブロート（Julius Klaproth, 1783-1835）の出会いは、後述するように、日本語の用字法に関する重要な知識をヨーロッパ側にもたらし、その『三國通覽圖説』の翻訳、長崎のオランダ商館長をつとめたティツィング（Isaac Titsingh, 1845-1812）が日本からもたらした「改正日本輿地路程全圖」にみえる地名の音訳の改訂、さらにケンペルが収集し、大英博物館に収蔵されていた石川流宣の「萬國総界圖」の元図の推定の基礎となったことが判明してきたのである。また「改正日本輿地路程全圖」は、英国のプロートン（William Robert Broughton 1762-1821）、ロシアのクルーゼンシュテルン（Adam Johann von Krusenstern, 1770-1846）のような航海者だけでなく、英国のアロースミスのような地図作製者、さらには日本人漂流者の上記新蔵と石巻出身の善六（1769-1816 頃）がそれぞれに参照し、元図として利用したこともあきらかである。

このようなつながりを検討すると、西欧側の日本製図に対する関心がどのようなところにあり、さらにそれを通じた日本理解がどのように進行したか、多角的に見えはじめる。合わせて指摘しておきたいのは、まだこの方面での研究は始まったばかりであり、今後さらに他の例が発見される可能性が大きいことである。本稿では、これまでの理解を整理し、今後に備えることもめざしたい。

以上のような見通しにむけて、以下ではまず西欧における日本製図の利用の画期についての検討から始め、順次時期を追って諸例を検討する。ただし、ここで扱う諸例は同時進行のようなかたちで展開しており、記述が必ずしも年代順にならないことをあらかじめおきたい。また以下では日本製地図の流出ルートにも関心を寄せ、鎖国期にそれがどのように進行したかについても言及したい。

なお以下では、議論の展開の理解のため日本で作製された図のほか、それらにもとづいてヨーロッパで作成された図の画像を示すが、紙数ならびに掲載許可の関係で、少数に限定し、またそのサイズも縮小する。より大きな図の参照が必要な場合は、基本的には小林ほか編（2019）、ドベルク（1989）、さらに秋月（1999: 161, 207）の参照をお願いしたい。

2. ヨーロッパにおける日本製図の利用の時期

ヨーロッパにおける近世日本製図の利用の具体例の検討に入るまえに、まずそれが行われた時期に明確な特色が認められることに触れておきたい。

のちに詳しく触れるように、ヨーロッパで利用された近世日本製図の多くは、多数とはいえないとはいえ、その多くは刊行された絵図であった。さらに本格的な検討が必要であるが、この点はケンペルが日本で入手した地図のリスト（古賀 2008: 75）やオランダ商館長のかたわら日本研究に励んだティツィングの収集地図（Lequin 2003:88-94）からも確認できる。小野寺ほか編（2016: 100-111）にみられるシーボルトが第一次来日時にヨーロッパに持ち帰った日本製の絵図・地図のリストでは、残念ながら刊行されたものと手描きの写しの区分が記入されていないが、注記から推測すると前者の方がはるかに多いと考えられる。

こうした刊行図については、やはりオランダ商館で医師として活動したツェンペリー（Carl Peter Thunberg, 1743-1828）の日本での地図の入手に関する「・・・一般的な（日本の）国の地図の他に、私は江戸、都、大坂、長崎の町の地図を見た。さらに大変な危険をおかして、禁制品であるそれらを国外へ持ち出すことがきた」という指摘（ツェンペリー 1994: 286）に見られるような規制があったことを、もちろん考慮しておく必要がある。この規制は徐々に緩和されたようであるが、市中で購入できる刊行図は、それ以外の図と比較すれば外国人にとって入手しやすいものであったとみてよいであろう。またこの場合、長期的に見るとそれらには流行があったことも重要である。ケンペル、ティツィング、シーボルトの収集図はその移り変わりをよく反映している。つぎにこの側面に焦点を当ててみよう。

海野一隆氏の「近世刊行の日本図」は、1972年に刊行された『日本古地図大成』に付された解説文（海野 1985a: 126-138 に転載）であるが、その時期区分からこうした日本図の移り変わりを巨視的にうかがうことができる。この解説文では、近世を3つに分けて紹介する。近世初頭は「行基図から慶長図へ」と命名され、17世紀第3四半期までつづく。つぎの「流宣図の時代」は以後18世紀第3四半期までで、最後の「赤水図の時代」は幕末期まで

ある。

それぞれの時代は代表的な図名あるいは地図製作者名によって命名されており、古い図の系譜をひく行基図につづく慶長図は、「慶長日本図」と呼ばれてきた日本総図で、川村（2010:52-58）が「寛永 B 型日本図」とするものの系譜をひく刊行図である。「新改日本大絵圖」（内題「扶桑國之圖」、1662年刊）のほか、後述する「新撰大日本圖鑑」（1678年刊など）がこれに属すと考えられている。

つづく「流宣図の時代」は石川流宣作の図が、さらに「赤水図の時代」は長久保赤水の図がよく使われた時代となる。なおこの時代区分で伊能忠敬の図がよく使われる時代がないのはふしぎと思われるかも知れないが、伊能図は幕府によって秘密図とされ、一般に使われるようになるのは幕末の最末期であったことを思い出していただきたい（小林ほか編 2019: 78-79 参照）。

以上のような流れを、それぞれの時代の特色を考慮しつつまとめるとつぎのように理解できる。古拙な行基図にかわって刊行された最初の本格日本図が「慶長図」系図、それにさまざまな新要素をくわえ、人気に支えられて長期間刊行されつづけたのが流宣図、さらに誌面に多くの情報を詰め込んだダイアグラムのような流宣図にかわって、距離や方位の正確さを追求したのが赤水図ということになる。この場合、とくに注目されるのは100年ほどもつづいた「流宣図の時代」を終わらせたのが赤水図、つまり「改正日本輿地路程全圖」の刊行開始（1779年）で、以後流宣図は印刷されなくなってしまったことが確認されている（三好 1989）ことである。「流宣図の時代」から「赤水図の時代」への変化は、地図のスタイルの変化だけでなく、地図の役割に関する人びとの考え方の転換でもあったことがうかがえる。

ここで注目されるのは、以上のような変化がヨーロッパにおける刊行日本図の利用にややおくれて波及する傾向があきらかなことである。後述のように、流宣図の翻訳図といえるようなものが1715年にオランダで刊行されはじめ、さらに上記の「新撰大日本圖鑑」と流宣図を編集した日本図が1727年にケンペルの遺著『日本史』（英語版）に掲載されることになる。また赤水図の場合は19世紀初期にヨーロッパに紹介され始め、とくにフランスの東洋学者、アベル＝レミュザ（Jean Pierre Abel-

Rémusat, 1788-1832) が、赤水図に描かれた緯線（東西線）とそれに直交する南北線に、西欧の近代地図を思わせるとして注目し、「偉大な地理学的モニュメント」と評価することになった (Abel-Rémusat 1817)。ティツィングが日本からもたらした資料の一部をその死後に入手したアベル＝レミュザは、そこに含まれていた日本の刊行図をくわしく紹介した。このなかには赤水図にくわえて、林子平の『三国通覧圖説』の付図もふくまれていたことは、ヨーロッパにおけるこの時期の日本刊行図の利用を大きく特色づけることになったのである。

ところで、このようなヨーロッパにおける日本製図の利用の転換は、日本における蘭学勃興とともに進行した西欧製の地図の利用や世界地理の探究とほぼ並行して進行している。また長崎のオランダ商館を経由するものだけでなく、ラクスマンのようなロシアの使節の到来が、地理情報の交換をともなっていたことも注目される。以下、このような過程を考慮に入れつつ、検討を進めたい。

3. 流宣図の時代の日本製図の利用

17 世紀の後半にはじまる日本図の本格的な刊行が、ヨーロッパにおける日本製図の利用に反映したことはすでに触れた。これらの新型日本図は、共通した特色を持っていることにまず留意したい。北東～南西に延びる日本列島を地図の枠に合うように東西に描き、そこには各国（クニ）の境界と国名を示すわけである。そこで注目されるのは、初期の段階から主な城下町の名称を示すだけでなく、各国の石高を示す表が付されることであろう（新改日本大絵圖）（内題「扶桑國之圖」、1662 年刊）。「新撰大日本圖鑑」になると（海田 2017: 14-15）、各国の領域には主な大名の名前や石高、城下町まで記入されようになる。この場合、大名の国替えなどが行われると実状と合わなくなるが、「新撰大日本圖鑑」の場合は延宝 6 (1678) 年版と同 8 (1680) 年版が知られていて、変化を反映するようになっていた（上杉 2007: 45-46）。

そのご 1687 年になると石川流宣の「本朝圖鑑綱目」が刊行されるようになる。これも国ごとに城下町や大名の石高を掲載し、以後図名が変わりながらも、18 世紀まで刊行がつづく（三好 1989）。さらに 1690 年代になるとこれをさらに充実させ、絵画的な描写も増やした「日本海山

潮陸圖」（ただし古河歴史博物館蔵の元禄 7 [1694] 年版の外題は「(新板大圖) 日本海山湖陸圖」となっていることに注意 [小林ほか編 2019:8]) が刊行されて、以後やはり名前を変えながら 1778 年頃まで刊行がつづけられた（三好 1989; 海田 2017: 6-11）。

以上のような日本図は、各城下への大名の配置だけでなく、交代の多い大坂城代や京都所司代の担当大名も示し、「武鑑」（大名などの姓や系統、領地、位階や屋敷地、石高などを示した名鑑）に通じる性格があると指摘されているが、各地間の旅程や街道筋の宿場なども示すようになり、多面的に使える地図であった。

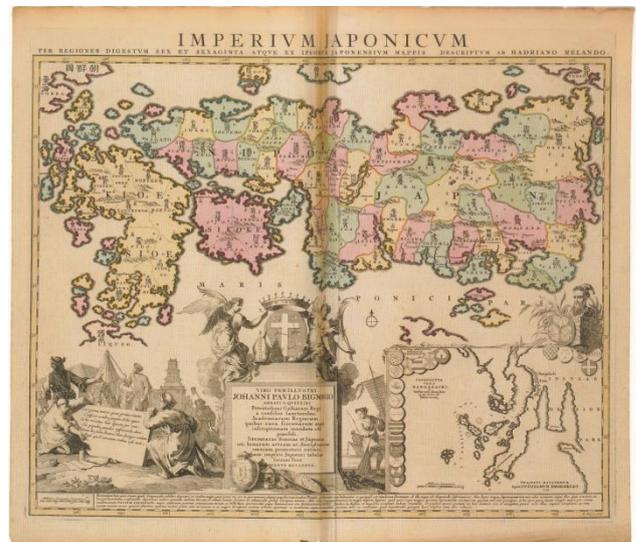


図 1 : Imperivm Japonicvm, Adriaan Reland (レランド「日本帝国」), 54.5×65.8cm, 1715 年, アメリカ議会図書館蔵 (LCCN: unk81005074, Call number: G1015.C68 1761 [in vault, volume 8, Phillips 3448])

このうちの「日本海山潮陸圖」にもとづく日本図が「IMPERIVM JAPONICVM」（「日本帝国」）というタイトルで 1715 年にアムステルダムで刊行された。元図はオランダ東インド会社の重役がもっていたもので、長崎オランダ商館を通じて本国に流れたものであろう（図 1）。編集は東洋学者の Adriaan Reland (1676-1718) が担当している。彼はユトレヒト大学の東洋語の教授で、イスラム学を専門とし、当時のヨーロッパのイスラム理解を前進させたと評価されている。また日本語についてもある程度の知識をもっていたという (Hamilton 1998; コーニツキー 2018: 29-30)。ただし、「日本帝国」図作成にあたり、「日本海山潮陸圖」にみられる多くの要素を省略して

おり、地名については各国（クニ）の漢字名とその音訳（オランダ語綴り）を示すだけである。

国（クニ）の境界を示し、ローマ字表記の国名を記載する日本図は、17 世紀初期にはヨーロッパでつくられており（ワルター編 1993: 106-107 のブランクスによる図など）、とくに新しいことではないが、漢字を示すのはこの図が最初と思われる。ただし、ここに示された漢字はもとの「日本海山潮陸圖」に見られるものをそのままねており、作図者側に漢字の書法等に関する知識はなかったと推定される。これからすれば、漢字の国名を示したのは図にエキゾチックな雰囲気をもたらすためであったと考えられる。右下に配置された長崎付近の図の隅に円で囲った家紋と考えられるものを並べているのもそうした効果をねらったものであろう。この図は人気を博したらしく、ワルター編（1993:132-137）などにいくつもの続版が示されている。

もうひとつが、すでに触れたケンペルの遺著『日本史』に付された日本図である。ケンペルは日本に滞在した 1690～1692 年に、上記のような「新撰大日本圖鑑」（ワルター編 [1993: 138] 掲載のように、版木の刊記が削られていて刊行年が不明だが、1678 年刊とされている）を入手し、その内容が検討に値すると判断して通詞に読ませ、同様の図を作製して各国の領域にその翻訳を記入した。ただし、ケンペルの遺著の翻訳・編集に当たったショイヒツァー（Johann Jacob Scheuchzer, 1672-1733）は、このケンペルの作業を採用せず、「新撰大日本圖鑑」の元図を中心に「日本海山潮陸圖」と思われる図の要素を一部採用して、付載用の日本図を作成した。それに際して、各国の漢字地名とそのアルファベット表記（タイトルに合わせラテン語綴り）を示した。さらに大黒や夷（えびす）のような画像も描きくわえ、エキゾチックな雰囲気を強化している。

このショイヒツァー編集図の本州は、「日本海山潮陸圖」のように東西に長くはなく、陸奥や出羽が北側に突き出す形となっており、その北には「松前」を「Jesogasima」（蝦夷が島）から離れた島として描いている。他方、左上には 2 点の図を示し、北東アジアと津軽海峡を示すが、後者では上記の島として示された松前が見当たらない。この部分は、当時のヨーロッパの北東アジアに対する関心に応えるため、あえて矛盾した図を示

したと考えられるが、当時のオランダ海図に見られるオランダ東インド会社のフリース（Maarten Gerritsz Vries, 1589-1647）が率いた探検航海の成果（小林 2020 参照、フリースは 1643 年に今日の千島列島南部、北海道東部および樺太南部を探検）が示されていないのは、このケンペルの遺著の刊行自体が、その資料を購入した英国のスローン卿のもとで進められたからであろう（Brown 1993）。

このショイヒツァー編集の日本図は、レランドの編集した日本図に比較すると日本列島の概形をなんとか表現し、またエキゾチックなこともあってか人気を博し、19 世紀になるまでプリントされたようである。なお、このケンペルの遺著は 19 世紀前半になっても日本からの購入依頼が続き、それはとくに掲載された多数の図版を楽しむためだったと考えられている（永積 1998: 37）。図版の多い『日本史』は日本でも愛好者を獲得したわけである。そのなかでもショイヒツァー編のこの日本図は人気を集めたと考えられ、現在もなおおふしぎな魅力がみとめられる。

ところでこうしたレランド図やショイヒツァー編集図は、単独の日本図として印刷されることが多かったと考えられる。とくにレランド図の場合はいかにも長方形の用紙に収まるようにデフォルメされており、ワルター編（1993）などに掲載されるアジア図や世界図をみると日本列島の所在を示す際には、使われている例が示されていない。ショイヒツァー編集図になると、アジア図などへの転載といてよい使い方もあらわれるが、他のタイプの日本図を駆逐するほどのものではなかったと考えられる。

18 世紀にヨーロッパで参照された日本製の図は、以上だけではなかった。やはり石川流宣が描いたが、北太平洋の探検に関連した参考図として、やや意外ともいえる角度から検討されたものがある。やはりケンペルが持ち帰った世界図、「萬國総界圖」である。東を上にした縦長の楕円形の図で、最初の刊行は 1688（貞享 5）年、さらに 1708（宝永 5）年の再刊が確認されている。ただしこれは、1645 年以後に刊行された「萬國総圖」という名称の世界図と人物図を組み合わせた図の系譜をひくものである。「萬國総圖」の世界図は「萬國総界圖」と同様に東を上にした縦長で、他方人物図は世界のさまざまな人び

との姿を、小さな枠の中に男女組み合わせで表示する。これは一種の民族図譜で、庶民らしい男女が描かれている場合も多いが、その冒頭にあらわれる日本の場合は、鎧兜姿の男性と十二単の女性、隣の中国（「大明」と表記）は上流階級と思われる男女となっている（海田 2019: 34-63）。

さてこの世界図でとくに注目されたのは、日本の東方に小さなふたつの島を描き、片方に「金ノ嶋」、他方に「銀ノ嶋」と記している点である。ヨーロッパ人は古くからアジアには金銀のたくさんとれる島があると考え、彼らがアジアに到来するようになってからはその探索を進め、そうした島が見つかる可能性のある地域は、北太平洋の日本の東方と考えられるようになった（船越 1976: 33-40）。

こうした考えが日本に知られたのは、スペインのノバイスピニア（メキシコ）総督がヴィスカイノ（Sebastián Vizcaino, 1548-1624）に命じて 1611 年に日本との貿易交渉とともに、帰途にこれら金銀の島の探索を行わせて以後のことと考えられる（船越 1976: 37）。なおショイヒツァー編集図に関連して触れた、オランダのフリースの探検航海もこの「金ノ嶋」・「銀ノ嶋」探索を目指していたが、もちろんその発見には至らなかった（Hayes 2001: 34, 36-37）。ともあれ「萬國総界圖」の元図になった「萬國総圖」にはこの種の島も描かれていることにまず注意しておきたい。

ケンペルがヨーロッパに持ち帰った石川流宣の「萬國総界圖」に話をもどすと、ヨーロッパの雑誌（1747、1749 年）や学会（1753 年）で、話題の中心になったのはこの図の本州の東方海上の「蝦夷島」と記された陸地であった（古賀 2008）。蝦夷の島といいながら、現在の北海道とはあまりにかけ離れた位置にあるのがまずふしぎである。またこの陸地は、「萬國総界圖」の元図である「萬國総圖」にもみられない。石川流宣がこの「蝦夷島」をどのような経緯で記入したのかは不明であるが、これはヨーロッパの航海者のいう「ガマの陸地」ではないかというわけである。

インド航路を発見したバスコ・ダ・ガマ（1460 頃-1524）の孫にあたるジョアン・ダ・ガマ（João da Gama, 1540 頃-1591 以降）は、1588 年にマカオからメキシコにむけて出発し、暴風で船が損傷し、日本で修理してから北太平洋を通過する航路をとった。その際に蝦夷を過ぎてから

別の島に接し、これについて報告して以後、これは「ガマの陸地」と呼ばれ、地図にも記載されて探索が行われるようになった（Hayes 2001: 58-60）。「萬國総界圖」には「金ノ嶋」・「銀ノ嶋」の記載はないが、別の場所に描かれた島が「ガマの陸地」の存在を示唆すると受け取られることになってしまったわけである。

ともあれヨーロッパでは日本製の世界図がこのような地理学的探究に役に立つと思われていた点は、注目されてよい。これに注目した論者は、日本人の地理的知識は太平洋にむけて大きく広がっていたと買いかぶったようである。

のちにこの海域を探検したフランスのラペルーズの航海にはまた触れたいが、出発前に与えられた指示もあって、1787 年に 10 月にこの種の島の探索を試みている。鳥がマストに止まるとか、ウミガメが泳いでいるとか陸地の近いことがうかがわれたにもかかわらず、それを発見できなかったと述べている（ラペルーズ 2006: 376-379, 468-469）。さらに 1804 年にはロシアのクルーゼンシュテルンもこの海域を通りかかった時に短期間ながら探索を行った（Krusenstern 1813: 203-206）。クルーゼンシュテルンの航海記の記述では、探索の対象が「金ノ嶋」・「銀ノ嶋」なのか、「ガマの陸地」なのか区別が容易でないが、まだこうした島が人びとの注意をひいていたのである。なおこの海域では、ラペルーズの航海記では荒波に、クルーゼンシュテルンの航海記では霧に悩まされたと記されている。そうした条件も、陸地の誤認を生むと考えるべきであろう。

ところで、このように取り扱われた「萬國総界圖」がさらにのちになって、すでに触れた東洋学者のクラブロートによって検討されたことについても言及しておきたい。クラブロートは中国語、さらに漢字についての知識をもとに、後述のように日本人漂流者、伊勢出身の新蔵から日本語を学んでおり、片仮名や漢字で書かれた地名の検討から、そのもとになったのは古いヨーロッパ製の地図であると指摘している（Klaproth 1828）。クラブロートは後述するようにアジア各地の地図にも強い関心を持ち、それによって蓄積された知識もこの判断に重要な役割を果たしたと考えられる。

なお「萬國総圖」はもともと明代の「坤輿萬國全圖」をおもな元図としているとされてきたが、近年ではマテ

オ・リッチの東西半球図をもとに、当時の日本にあった地理情報を補って作製されたと考えられるようになっていく（青山 2013）。また石川流宣は、「萬國総界圖」の作製に当たって、「萬國総圖」系の図にかなり恣意的ともいえる編集を加えたとも考えられている（古賀 2009）。ただし、それにもかかわらずクラブロートによって古いヨーロッパ製の地図をもとにしていると評価されたのは、なおあちこちに原型をとどめていたからである。

4. 赤水図の時代の日本図の利用と日本研究の深化

「赤水図の時代」に移ろう。長久保赤水の「改正日本輿地路程全圖」が最初に刊行されたのは 1779 年となる。以下その時期からはじまる時期の年表を付しているのので、これを参照しながら経過を紹介したい。

ティツィングによる地名の音訳 長崎のオランダ商館にティツィングが最初に着任したのはやはり 1779 年であった。1784 年までの断続的な商館長の任期の間に彼は 2 度江戸参府を行っており、「改正日本輿地路程全圖」を入手することは容易であったと考えられる。日本研究を志したティツィングは、その間に蘭学に関心を抱く多くの日本人と接し、この中には大名もいて離日後も手紙を交換した。もちろんティツィングはそれまでに上記のようなレランドやショイヒツァー編の日本図に接していたに違いなく、これらと大きく違う長久保赤水の「改正日本輿地路程全圖」は、日本の地理の理解にとって重要と判断したと思われる。

ただし問題はこの図に載せられた地名であった。漢字や片仮名で書かれた地名には難読なものも多く、彼は地図上の地名の脇に、国（クニ）ごとに通し番号を付け、別の帳簿にオランダ通詞から聞いたその音を番号順にオランダ語綴りで記載するという作業を行った。地名は 4 千以上もあり、楽な作業ではなかったと考えられる。ただし最初の作業が終了してから「改正日本輿地路程全圖」の改訂版（最初の版を「安永早期版」、つぎの版を「安永後期版」とよぶ〔小林ほか編 2019: 26-27, 62-65〕）が刊行され、番号を新たに全部書き直して音訳を記した帳簿を作製した。「安永早期版」と「安永後期版」の違いは、おもに東北地方の地名の増加であるが、再度この手間のか

かる作業を行ったのは、彼の熱意を示している。

離日後、インドやバタビアで勤務したティツィングはヨーロッパにもどり、日本図だけでなく他の日本の書物の翻訳の刊行をめざすが、実現できずに死去することとなった。ただし彼の集めた日本資料はヨーロッパでは当時から有名で、いろいろな論評を呼んだ。

これらの図と表は現在オランダ王立図書館（ハーグ）、ライデン大学、フランス国立図書館、大英図書館に分散して収蔵されているが、地名の番号を照合することによって、それぞれのセットが確認できる。図 2 はライデン大学に収蔵されている最初の地名の音訳に利用された日本図で、とくにその下北半島の海岸線から、長久保赤水の日本図の初期の版であることが明らかである。

ケンペルの遺した資料がほぼ一括して英国のスローン卿に引き取られたのに対し、ティツィングの場合はその死（1812 年）のあと何度も競売にかけられたため、このように分散することになったが、なんとかもとの形がわかるのは幸いである。このうち「安永後期版」の図と地名を記した帳簿はのちクラブロートが入手して、校訂した地名の音訳を掲載した図をつくったが、それに至る経緯についてはのちに触れることにして、ティツィングにつづいて長久保赤水日本図に接した西洋人について触れたい

松前藩士、加藤肩吾を通じた日本製図の流出とクルーゼンシュテルンによる利用 長久保赤水の日本図は、蝦夷地からもヨーロッパに流出した。漂流してロシアに保護された大黒屋光太夫（1751-1828）らを送還しつつ、日本に通商を求めて 1793 年に来航したアダム・ラクスマンは、応対に当たった松前藩士の加藤肩吾と地図情報を交換した。両者とも樺太や千島に関する地理情報を求め、この交換は相互に利益のあるものであったと考えられる（秋月 1996）。

これによって日本図を受け取ったラクスマンは、帰国後ペテルスブルグの科学アカデミーに寄贈した。ラクスマンの父、キリル・ラクスマン（Kirill Gustavovič Laksman, 1737-1796）はスウェーデン系の科学者で、イルクーツクで科学研究を行っており、大黒屋光太夫の送還に尽力しただけでなく、ロシアの科学アカデミーの会員であったことから（木崎 1992: 51-52）、このような寄贈が行われたのであろう。

「赤水図の時代」における海外での日本製図の利用に関する年表

地図・書物の刊行		西欧諸国船の日本近海航海と地図情報	
時期(西暦)	著者、刊行地図・書物	時期(西暦)	航海者
1779	長久保赤水「改正日本輿地路程全圖」の初版	1779	ティツィング(蘭)長崎への最初の着任
		1780	クック(英)第3回航海(船長はキング)
1786	林子平『三国通覧圖説』刊行	1787	ラペルーズ(仏)の探検航海
		1791	アルゴノート号によるコルネット(英)の航海
		1792-3	ラクスマン(露)来航、「松前地図」、赤水図入手
		1796	ブロートン(英)の探検航海、「松前地図」入手
1797	『ラペルーズ航海記 1785-1788』刊行	1797	ブロートン(英)の再来、赤水図入手
1802	「松前地図」を転載した「太平洋におけるロシア航海者たちの発見地図」完成		
1804	ブロートン『航海記』刊行	1804-5	レザノフ(露)来航(船長はクルーゼンシュテルン)
		1805-6	(クラブロート、イルクーツクで新蔵と会う)
1809	新蔵・善六訳「日本国の一般図」刊行		
1811	アロースミス、コルネットの航海記で修正した赤水図を転載した「日本および千島諸島などの図」刊行	1812	ヨーロッパに帰っていたティツィング死去
1813	クルーゼンシュテルン『世界周航アトラス』刊、赤水図による「日本島(本州)と日本周境界の図」を収録	資料：ドベルク(1989)、秋月(1996)、小林ほか編(2019)	
1827-35	クルーゼンシュテルン『太平洋アトラス』刊、赤水図による「日本帝国図」を収録		
1832	クラブロートの仏訳『三国通覧圖説』刊行		
1735	クルーゼンシュテルンの「日本帝国図」にもとづく、有用な知識普及協会の「日本帝国」刊行		
1855	クルーゼンシュテルンの「日本帝国図」にもとづく英国海図 2347 号刊行		

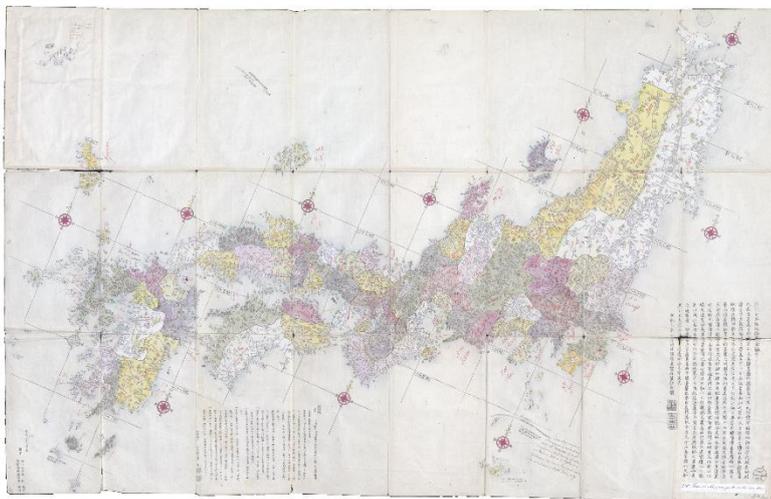


図 2: 長久保赤水「改正日本輿地路程全圖」(安永早期版, 83×134cm, ライデン大学図書館蔵[Ser. 220a]), ティツィングが作業用に使い、国(クニ)ごとに地名に通し番号を記している。



図 3 : Karta ostrova Nipona i Japonskago morja. (クルーゼンシュテルン「日本島（本州）と日本周辺海の図」, 43.6×43.6cm (図郭のサイズ), Kruzenštern 1813. *Atlas "k" putešestviju voklug" sveta kapitana Kruzenšterna. Sanktpeterburg, Tab. 42, アメリカ議会図書館蔵 (LCCN: 33038062)*)

こののち 1804 年に長崎に来航したロシアの使節レザノフの乗船となったナジェジダ号艦長であったクルーゼンシュテルンは、帰国後『世界周航アトラス』（1813 刊）を刊行する。それに掲載された「日本島（本州）と日本周辺海の図」（小林・鳴海[2018]では「日本諸島と日本海の図」と表記）（図 3）は、ラクスマンの寄贈した日本図にみえる海岸線を、先行する英国船の航海記録と自分の測量データをもとに補正して描いたもので、その元図は容易に長久保赤水の日本図であったと判断できる。ただし、それにみえる多数の地名は「日本島（本州）と日本周辺海の図」に反映させることはできなかった。なおこの経緯は、クルーゼンシュテルンがのちに刊行する『太平洋アトラス』の解説書に触れられている（Krusenstern 1827: 130-131）。ただし後述するように、クルーゼンシュテルンはこの『太平洋アトラス』で、「日本島（本州）と日本周辺海の図」を大幅に改訂することになった。

加藤がラクスマンに見せて複写を許した日本関係の地図についても触れておかなばならない。加藤自身の描いた「松前地図」である（秋月 1999: 160-162）。この図は蝦

夷（現北海道）と樺太を描くもので、ロシア海軍では 1802 年刊の「太平洋におけるロシア航海者たちの発見地図」に反映させた（秋月 1996; 1997; 1999: 179, 207）。この図はベーリング海峡を中央上部に示し、東側にアラスカ以東の北米大陸、西側にカムチャツカ半島やオホーツク海を描いて広域をカバーする海図で、左下に蝦夷を配置している。図 4 はその左下部分をトリミングしたものである。樺太（キリル文字でサハリン島またはチョコと記入）はラペルーズの航海でその姿がほぼあきらかになっているのに、その南にも小さく樺太、さらに南にやや大きく蝦夷（マツマイと記入）を描くのである。この小さな樺太と南北にやや長い蝦夷地は、加藤の「松前地図」の転写であるが、当時はまだサハリンと樺太は同じ島ではないと考えられていたことも反映している。

すでにラペルーズは 1787 年の探検で蝦夷と樺太の位置関係を把握していた（ラペルーズ 2006: 322）。ただしこの認識がヨーロッパ側の航海者に共有されるのは、ラペルーズの航海記の刊行（1797 年）以後とおそくなった。ラペルーズの艦隊の遭難による全滅のため（佐藤 2006）、航海記はそれ以前にヨーロッパに送られた記録にもとづいた刊行になったことが関連していると考えられる。なお長崎でのレザノフの交渉失敗のあと、1805 年にこの海域を航行したクルーゼンシュテルンは、ラペルーズの航海記を参照しながら、「太平洋におけるロシア航海者たちの発見地図」のこの部分について、大黒屋光太夫がロシアに残した地図を元図にすると述べてつ、そこに樺太と示された小さく描かれた島を探索しようとした（Krusenstern 1813, vol.2: 28-29）。クルーゼンシュテルンは、ラクスマンが写した図を大黒屋光太夫によるものと理解していたのである。ともあれその航海で、クルーゼンシュテルンのもくろみは裏切られることとなった（秋月 1999: 205-209）。

他方、日本側が西欧でいうサハリンと日本側が樺太と呼ぶ地域が同じ島をさしているのを確認するのは 1808（文化 5）年の間宮林蔵と松田伝十郎の探検の成果を高橋景保が翌年に検討してからである（船越 1986: 197-203）。それぞれの地図に描かれた地名を照合してその一致を確認し、両者は同一の島と判断されることになった（松浦 2012）。高橋はのちにシーボルトからクルーゼンシュテルンの航海記を入手して翻訳させ、『奉使日本紀行』が作成されることになる。この関係部分（クルーゼンシュテルン 1979: 181-191）を興味ぶかく読んだと考えられる。



図 4: Karta morskix" otkrytij Rossijskimi moreplavateljami na Tixom' i Ledovitom' morija' v' raznyv' godalxy' učineinennyx". (「北太平洋におけるロシア航海者たちの発見地図」, 72×121cm, 1802 年, アメリカ議会図書館蔵 (LCN: 2009575229), 南東部分をトリミングしている。

大黒屋光太夫の残した日本図 以上に関連して、アダム・ラクスマンによって送還された大黒屋光太夫がロシアに残した日本図について触れておきたい。この日本図は現在ドイツやロシアに残されており、その特色が検討されている（岩井 2000 など）。これには 66 の国（クニ）が示されるが、九州と本州が陸続きのように描かれ、『節用集』掲載の日本図を元図にしたと推定されている。『節用集』は明治まで日本で用いられた辞書で、光太夫はロシアに 2 冊を持参していたことがわかっている（亀井 1967: 21-33）。その一つは後述する『早引節用集』で日本図が掲載されておらず、もう一冊に元図となった日本図が掲載されていたと考えられ、その原本が探索されている。またロシア側がこの日本図をどのように受け取ったかは、まだよくわかっていないようである。

加藤肩吾とブロートン 上述の加藤肩吾はまた、1796 年と翌 1797 年に蝦夷地に近づいた英国艦の対応にもあたり、やはり地図情報の交換を行った。その際、加藤はク

ック船長の世界地図を受け取っている。ラクスマン来訪時にロシア語を学んだ加藤は、英国艦のロシア人船員と会話し、艦長のブロートン（William Robert Broughton, 1762-1821）は、加藤がロシアに行ったことがあると思ひ込むほどであった。1797 年の来訪時には、加藤は誰からももらったか口外しないようにとことわりながら「大変よくできた日本の地図」をブロートンに渡した（Broughton 1804: 100-101, 271-272）。ブロートンは、帰国後の 1804 年に刊行した航海記の冒頭に大きな海図を掲載し、その中央部に示した日本列島のうち、彼が航海できなかった海域の海岸については、この日本図を参照して描いたとされており、その海岸線から加藤の与えた図が長久保赤水の日本図であったことが明らかである（小林ほか編 2019: 18, 55-56）。

加藤はまた、1796 年にラクスマンに与えたのと同じ自製の図と考えられるものを、ブロートンが複写することを許すだけでなく、翌日には自分たちで用意した写しを提供した（Broughton 1804: 100-101）。ラペルーズの航海記はブロートンの航海の時期にはまだ刊行されておらず、翌年には加藤の図の複写を参照しながら蝦夷の西岸を航行し、実際の樺太（サハリン）と加藤の地図とは一致しないことを確認した（Broughton 1804: 295; 秋月 1999: 196-199）。

以上、松前藩の加藤肩吾の提供した地図情報が、クルーゼンシュテルンとブロートンに参照された経過を示した。長久保赤水の日本図および加藤自身が作成した「松前地図」は彼らによって真剣に検討されたことがわかる。こうした地図情報の流れを作った加藤とラクスマンの出会いについては詳細な検討があり（村山 1967; 1968）、とくに多面的な交流は示唆的であるが、ブロートンとの出会いもふくめて、さらに検討が要請されているように思われる。当時は幕府も蝦夷北辺の情報収集を行っており、その松前藩の情報収集との関係に関心がひかれる。また外国船員との情報交換に対する考え方などは、のちにみる中川五郎次のロシア側に渡った日本地図の秘匿では、大きな変化がみとめられる。

クラブロートと新蔵の出会い 時期が前後することになってしまいが、クルーゼンシュテルンが日本付近を航行し、長崎に寄港する頃（1804-5 年）、すでに触れたクラ

プロートが、中国へのロシアの使節団に参加して旅行の途中、入国を拒否されイルクーツクに滞在し、伊勢出身のもと漂流者、新蔵と出会ったことをやや詳しく紹介しておかねばならない。

新蔵は大黒屋光太夫とともに漂流したが、ロシアでキリスト教徒に改宗し、光太夫と一緒に帰国せず、残留して当時イルクーツクの日本語学校の教師をしていた。クラブロートはアジア諸語の系統関係に関する調査をつけており、新蔵との出会いを日本語研究の絶好のチャンスと考えたと思われる。「七以呂波手本」をもとに平仮名や片仮名、万葉仮名などについて理解を深め、新蔵のもっていた、光太夫旧蔵と考えられる上記の『早引節用集』を利用して日本語とフランス語（コーニツキー2018: 43-44）、日本語とドイツ語の辞典（小林ほか2019: 29, 65-66）を作成した。『早引節用集』はとくに漢字の音読みや訓読みをイロハ順に示しており、漢字に深い知識を持つクラブロートには適した辞書であった。日本語とドイツ語の辞典は現在大英図書館に遺されており、その漢字は新蔵が書いた可能性がある。漢字の横には音読みや訓読みを示し、ドイツ語でその意味を記している。クラブロートは以上の作業で得た知識をもとに、のちに日本語の文字体系や用字法、さらにその発展について論文を書いている（Klaproth 1829）。

英国の日本研究者、コーニツキー（2018: 44）は上記の辞典の作成を紹介しつつ、「ヨーロッパ日本学の発展に対しての新蔵の貢献は大きかった」と書いている。クラブロートによれば新蔵の漢字に関する知識は十分なものではなかった。しかし、それはクラブロートが自身の知識で容易に補うことができるものであり、新蔵との出会いによって、ヨーロッパ人が日本語の文献を読む手がかりがえられ、大きな進歩のはじまりとなったわけである。

こうして日本語の書法について知識を得たクラブロートは、すでに触れたティツィングが2回目に地名の音訳作業を行った際に番号を記入した長久保赤水日本図とそれのできた地名表（現大英図書館蔵）を入手する。この経過や時期についてはわからないことが多いが、クラブロートは後述するティツィングの『日本王代一覽』の翻訳からわかる日本語理解を懸念し、この地名表の表記を校訂し、長久保赤水図をトレースした図に記入した。

現在大英図書館に収蔵されているこの図は、ティツィングがオランダ語綴りで書いた地名を、ドイツ語綴りで記している。これを調べると九州の難読地名はよく読めているが、東北地方の地名には誤読が多い。もともと長崎のオランダ通詞による読みの音訳であることを考えれば当然である（小林ほか編2019: 30-35, 65-67）。

ところで、クラブロートは同様にフランス語綴りで地名を記入した図を作ったようで、これをロシアの海軍に送ることとなった。ロシアではフランス語に通じた人が多いことを意識したものであろう。この図はクルーゼンシュテルンが利用し、『太平洋アトラス』所載の日本図を充実させることになるが、それは1820年代以後のこととなるので、あとで触れることにしたい。

新蔵と善六の翻訳図 ロシアに渡った長久保赤水日本図から作られた図としてもうひとつ挙げておかねばならないのは上述の新蔵とやはりロシアに残留した日本人漂流者、石巻出身の善六（1769-1816）が翻訳した「日本国の一般図」（1809年に刊行、図5）である。善六はレザノフの長崎来航時に送還された津太夫らと漂流したが、新蔵と同じようにキリスト教徒に改宗して、やはりイルクーツクの日本語学校の教師となった。

図5は、図2と比較してわかるとおり、元図が長久保赤水の日本図であることが明らかである。図形を変えずに音訳した地名をキリル文字で表記している。ただし、もと船乗りの新蔵と善六の難読地名に関する知識は限られており、のちにクルーゼンシュテルンは九州の地名の表記を例に問題点を指摘することとなった。

ところで、彼らが参照した長久保赤水日本図の来歴について、ロシアの古地図研究者はラクスマンの来航時かあるいはレザノフの来航時にロシアにもたらされたと考えているが（Postnikov 2000: 44-45）、すでにみたようにラクスマンが入手したものはロシアの科学アカデミーに寄贈されていた。他方レザノフの来航時には、ロシアの使節団の行動が厳しく規制され、また監視されて、日本の地図を入手することは不可能であったと考えられる。またレザノフは日本側との交渉が不調に終わり、長崎をはなれる前にロシア図や地球儀を日本側に寄贈しているが、その返礼になるような日本側から地理情報の供与は全く行われなかった（レザノフ 2000: 327-360）。

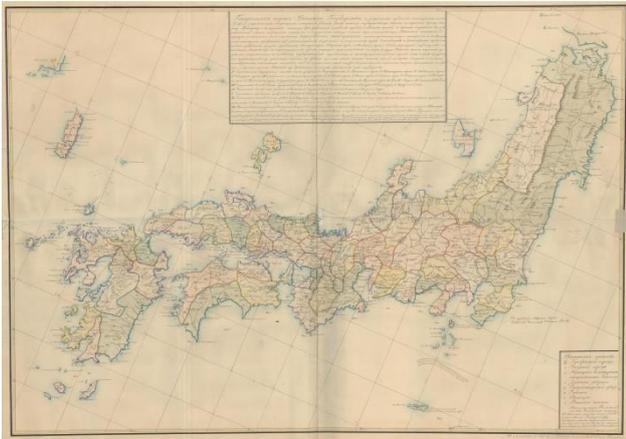


図 5： General'naja karta Japonskago gosudarstva.（新蔵・善六訳「日本国的一般図」[図名は「一般図」よりも「総図」とした方がよいかも知れない]，90×126cm，1809年，National Archives of Estonia (Tallinn)（EAA.1414.2.43.Sheet 63）

ただし日本側の資料からつぎのようなことが判明してきた。長崎での交渉に失敗したレザノフは、離日後国交を開くには武力が必要と考え、ロシアの海軍将校に指示し、1806年に樺太、1807年に樺太と択捉島の日本人集落を襲撃させた。これを日本側では「文化魯寇」（文化年間のロシアの襲撃）と呼んでいる。その際にロシア側が掠奪したもののなかに日本図があり、それを参照して善六が日本の地図を翻訳したことを、上記武力行使の際にロシア側に捕らえられた中川五郎次が書き残しているのである（小林ほか編 2019: 小林 2021）。五郎次は択捉島で漁場の取り締まりに従事しており、ロシア側に捕らえられてからと思われるが、強い反ロシア感情をもち、上記の襲撃による掠奪品を収蔵する倉庫にはいつて日本図を探し出し焼き捨てた。ただしイルクーツクで善六に会い、掠奪された日本図の一つを翻訳したと知らされることになったのである。

加藤肩吾のラクスマンやブロートンとの接触と比較すると、五郎次の日本図に対する見方は注目し値する。どのような経緯でこうした日本図観をもつに至ったか今後検討が必要と思われる。

英国の地図作製家、アロースミス 長久保赤水の日本図は英国にも到達していた。当時英国ではすでに海軍水路部が設立されていたが、なお民間の地図作製家の活動は

盛んで、アロースミスは、新しい航海データを迅速に海図に反映させる地図製作家として著名であった。クルーゼンシュテルンも日本の航海に際し、アロースミスの海図を参照しただけでなく、自身の日本図作製に際しても参考にしている。

アロースミスが 19 世紀初頭に刊行した海図にみえる日本列島を比較すると、1811 年刊行の「日本および千島列島などの図」は一部を除いて長久保赤水の日本図の海岸線によく一致する。一致しない部分は、1791 年に九州～中国地方北岸付近を航海した英国船（コルネット船長）の航海データを優先したことが明らかである（小林ほか編 2019: 60-62）。

なおアロースミスがどのようにして長久保赤水の日本図を入手したかは明らかでないが、長崎のオランダ商館を通じてヨーロッパに到来したものが市場に出て購入したか、あるいは彼のもとに持ち込まれたものであろう。

このアロースミスの日本図はその後広く引用されて流布するが、ただしやはり長久保赤水図に示された地名が読めず、複製としては不十分であった。ヨーロッパで主流となる、長久保赤水図を利用した日本図の刊行は、つぎに述べるクルーゼンシュテルンの改訂版日本図となる。

クルーゼンシュテルンの「日本帝国図」 クルーゼンシュテルンは上記のような『世界周航アトラス』刊行後、『太平洋アトラス』の刊行に向けて日本図を改訂しようとした。その大きなきっかけとなったのはドイツのワイマール大公からの長久保赤水の日本図の寄贈であった。シーボルトによれば同公はアムステルダムでこの図を購入したという（シーボルト 1978: 215-216 の注 44）。おそらく長崎オランダ商館経由でアムステルダムに到来したものであろう。他方、ラクスマンがロシアの科学アカデミーに寄贈した図は、クルーゼンシュテルンの閲覧後失われたとされており、あらたに入手したこの長久保赤水図は彼の意欲をかき立てたと考えられる。『太平洋アトラス』に掲載された「日本帝国図」にワイマール大公に対する献辞があるのはそのためである。

もうひとつのきっかけは、上記のようにクラブロートが作製し、ロシアに送ったフランス語表記で地名を記した日本図の参照であった。すでに述べてきたことから

わかるように、長久保赤水の日本図をフルに利用するには、多くが漢字で書かれたその地名の音訳をアルファベットで表記することが必要である。クラブロートが校訂したティツィングの地名表記載の表記は、それによって本格的な日本図ができる可能性を強く示唆したと考えられる。

クルーゼンシュテルンは、ただしクラブロートのフランス語綴りの音訳を採用する前に、新蔵と善六による上記の「日本国の一般図」（図 5）と対照している。ケンペルの『日本史』にみられる九州の小倉（こくら）と諫早（いさはや）の音訳と比較して、新蔵と善六の音訳は不正確と評価することになった。「諫早」は明らかに難読地名で、「小倉」もいくつかの読みが可能であり、クラブロートの読みはケンペルが現地で聞いたものに近いが、他方新蔵と善六の出身地を考えれば、九州の難読地名の読みはそもそも無理と考えるべきであろう。

また自身および先行する西欧の航海者の測量データのある部分については、1813 年刊の『世界周航アトラス』所収の「日本島（本州）と日本周辺海の図」の場合以上に細部が検討され、その過程は『太平洋アトラス』の説明書に詳しく記載された（Krusenstern 1827: 129-188）。

このようにしてできあがったのが「日本帝国図」（原題：Carte de l'Empire du Japon）である（図 6）。ラペルーズをはじめとする先行の航海者やクルーゼンシュテルンは、クロノメーターをはじめとする近代的測器を使用して測量を行ったが、日本列島についてはそれがおよばないところが多かった。

他方彼らの測量がおよんだ地域のデータで長久保赤水の日本図を検証すると、巨視的には一致する部分が多く、これを補正しつつもちいれば、日本列島の主要部分について、当面ある程度信頼できる地図が作製可能と判断して、この「日本帝国図」を作製することになったわけである。長久保赤水図は近世の地図作製の産物であるが、これが近代的測量技術によるデータによって検証されながら、近代地図の枠組みのなかに取り込まれることになったと言ってもよい。

これにあわせて重要なのは、当時のヨーロッパでは最先端と言うべき日本研究の成果である、ティツィングが収集し、クラブロートが校訂した地名データも記載されることになった。ティツィングの長崎着任時からすると、50 年近くかかったことになるが、当時のヨーロッ

パで考えられる最高水準の日本図ができたことになる。



図 6 : Carte de l'Empire du Japon (クルーゼンシュテルン「日本帝国図」), 91.0×(上辺: 68.0; 下辺: 61.8) cm, 上部張り出し部分の長さは 43.2cm, Krusenstern 1827. *L'Atlas de l'Océan Pacifique*. St. Pétersbourg, 22, アメリカ議会図書館蔵 (LCCN: 13023150). ただし本図については、1835 年までの修正を受けている。

そのごこの図が新型日本図としてヨーロッパに普及し、1855 年には英国海図の元図として採用される過程も本格的に検討する必要があるが、それはつぎの節で伊能図の海外での利用にあわせて検討したい。

アベル＝レミュザによる『三國通覽圖説』の紹介とクラブロートによるその翻訳 日本製図の複製・翻訳としてもうひとつ取り上げておかねばならないのは、『三國通覽圖説』附録図である。すでに引用したアベル＝レミュザの 1817 年の紹介記事では (Abel-Rémusat 1817)、長久保赤水図だけでなく、むしろ『三國通覽圖説』附録図について詳しく検討している。いずれもティツィングの収集

品である。またアベル＝レミュザはこの記事のなかで書名をあげているわけではないが、内容から『三國通覽圖説』によることに疑問の余地はない。

ところでこの論文では、“Bo-nin Sima”、つまり小笠原諸島の図に彼が強い関心をいただいていたことは、そのタイトル「日本関係資料からみた日本とマリアナ諸島間に位置するよく知られていない一団の島の記述」からも明らかである。小笠原諸島付近の探検史や 18 世紀後半以降のフランス船の近海通過に触れ、さらにプロートンやクルーゼンシュテルンの航海により位置がはっきりしてくる経過を示し、ケンペルの『日本史』の関係記述へとつづく。『三國通覽圖説』から作製した“Carte des îles Bo-nin ou Inhabitées”（「Bo-nin 諸島あるいは無人島の図」）も付している。日本の南方海洋の図を大きく示してその位置を描きこみ、右上に「無人嶋圖」と漢字のタイトルを示しつつ、『三國通覽圖説』附録図のうち伊豆半島や伊豆諸島の部分を省いて、小笠原諸島を大きく描く図を示している（後述のドベルク 1989: 63 の図 8 参照）。

このように小笠原諸島に強い関心を示す背景はあとから検討することにして、つぎにクラブロートの『三國通覽圖説』のフランス語訳（Klaproth 1832）を検討したい。クラブロートはこの序文に、1805 年にこの原本を入手したと書いており、イルクーツクで新蔵が持っていたものを譲り受けたようである。ただし、『三國通覽圖説』の日本での刊行は、大黒屋光太夫や新蔵が日本を出発してからのことであり、彼らがロシアに持ち込んだものとは考えられない。ともあれ『三國通覽圖説』を見て、クラブロートは自分の漢字の知識により、かなりが読めると自信を持ったとしている。

なお、『三國通覽圖説』については、ティツィングも母語のオランダ語に翻訳したいと試みたが未完に終わったという。その原稿は英国のマンチェスター大学図書館にあるが（コーニツキー 2018: 40-41）、これをクラブロートが見たかどうかは不明である。

クラブロートの仏訳『三國通覽圖説』は、ドベルク美那子氏により、クラブロート旧蔵でその書き込みのある『三國通覽圖説』原本（フランス国立図書館蔵）と詳細に比較された（ドベルク 1989）。ドベルク氏は付図の元図についても詳細に検討し、林子平の研究としても注目すべき成果を得ている。またクラブロートの日本語解説

は基本的に正確であるが、漢字で書かれた固有名の読みについては、苦勞していることを指摘した。その一端は『三國通覽圖説』の著者（林子平 [はやし しへい]）を“Rinsifée”としているところからもわかる。

クラブロートの『三國通覽圖説』の付録図についてもひとつ指摘しておかねばならないのは、その仏訳が刊行されたときには、多くが時代遅れになっていたことである。南北に細長く描かれた蝦夷や、別々に描かれたカラフト嶋（ただしアジア大陸と陸続き）とサガリイン（サハリン）を示す「蝦夷国全図」についてはラペルーズやプロートン、クルーゼンシュテルンの航海、さらには日本人の探検で、ヨーロッパと日本での認識が劇的に変わった。また北辺が扁平な朝鮮図は古くからのもので、18 世紀前半のイエズス会士などの測量によるダンヴィル図と比較しても充分なものではなかった（ドベルク 1989: 56-57 の図 6 と図 7 を参照）。琉球についても同様で、『三國通覽圖説』仏訳刊行前に出た雑誌論文に、クラブロートが Basil Hall の航海記付載の図（Basil Hall 1818）に加筆した図を添付したのは（Klaproth 1824）、彼自身その古さを痛感し、最新の図にみえる琉球の姿を紹介したかったからであろう。

ティツィングの遺品の『三國通覽圖説』付載の図を最初に解説したアベル＝レミュザが、小笠原諸島について詳しく解説し、さらにそれを紹介する図を添付したのは（Abel-Rémusat 1817）、明らかにこうした認識に基づいていたと考えられる。

なお、クラブロートの“Carte des îles inhabitées ou MOU NIN SIMA appellées aussi O GASSA WARAS SIMA”（「無人島あるいは小笠原と呼ばれる島の図」）は、原本に付されたやや長い文言は省略するが、忠実な翻訳と言ってよい（Harvard Map Collection, G7962_B6_1832_C3 参照）。仏訳『三國通覽圖説』の発刊前に、クラブロートは小笠原に関する記事を公表し、アベル＝レミュザが「無人」を“Bo-nin”と音訳したことについて、“Mou nin”（フランス語綴り）が正しいとするほか、その地図の縮尺の理解にも触れ、さらにアロースミスの作製図における小笠原諸島の表示の問題点も指摘した（Klaproth 1828）。これは他人の誤りを許さないクラブロートの個性にもよると考えられるが、他方でより正確な地理情報を社会にもたらしたいという強い希望を反映しているとも考えられる。

まだよく知られているとはいえないが、クラブロートは中国についても、長久保赤水図について行ったものと類似の作業をさかんに行っており、注目される。ともあれ、以上のようなアベル＝レミュザの記事、さらにクラブロートの翻訳が、欧米におけるその後の小笠原に関する基本文献となっていくのは、この時期の西欧における東洋学の貢献の意義を示すものであろう。

ところで、クラブロートはまたティツィングが手がけた『日本王代一覽』の翻訳を引き継いで完成させた（Klaproth 1834）。この書物は 1652 年に成立した歴史書で、代々の天皇の事績を掲載する。その序文でクラブロートは、ティツィングの略歴や日本語および漢字に関する知識について触れ、その固有の表記の改訂状況を示している。また関連して、当時すでに刊行されていた、長久保赤水の日本図をもとにするクルーゼンシュテルンの「日本帝国図」についても感想を述べているのも興味深い。クラブロートは自分が校訂した地名の一部だけをクルーゼンシュテルンが「日本帝国図」に記載したことが不満であったようで、自分の仕事の抄録に過ぎないと述べている。

アベル＝レミュザは 1832 年、クラブロートは 1835 年といずれも老年に達する前に逝去したが、彼らが日本で作製された地図の紹介、さらに翻訳に果たした役割は大きい。ヨーロッパにおける東洋学のパイオニアとしての彼らの役割はよく知られているが、この方面でも大きな貢献を行ったことは特筆すべきことと思われる。とくに地名の表記や音訳については、日本語の用字法の理解の進歩が大きな役割を果たしたのである。

5. 「日本帝国図」の普及と伊能図との交代

ヨーロッパにおける日本図において時代を画すことになったクルーゼンシュテルンの「日本帝国図」は、そのご広く普及していく。その一つのきっかけになったのが、英国での「有用な知識普及協会」（The Society for the Diffusion of Useful Knowledge）の出版物の一つとして、クルーゼンシュテルン『太平洋アトラス』所収の「日本帝国図」と「蝦夷島図」を組み合わせた「日本帝国」が刊行されたことが挙げられる（小林ほか編 2019: 36-39）。ただし「日本帝国図」とちがひ、この図は円錐図法で作図

されている。この刊行（1835 年）については、有用な知識普及協会の幹部であった当時の英国海軍水路部長、ボーフォート（Francis Beaufort, 1774-1857）が努力したと考えられる。ボーフォートがクルーゼンシュテルンの友人で、当時文通をつづけていたことが、これに重要な意義を持ったとみてよいであろう（小林ほか編 2019: 39, 70-80）。

この「日本帝国」を元図として刊行されたと考えられる一枚物の地図やアトラス所収の日本図については、すでに一部紹介したが（小林ほか編 2019: 40-43）、有用な知識普及協会刊行図と同様の円錐図法が多い。

これらにくわえて、当時刊行された日本関係の書物にも掲載の例を発見しているのでも、触れておきたい。ただしその場合、当時刊行の原本は筆者に閲覧困難で、リプリントによっている。Rundall（1850）は、16-17 世紀の日本について解説した書物で、航海記や旅行記のリプリントを刊行した Hakluyt Society から刊行された。巻末の会員名簿に著者の氏名がみえる。日本図は巻頭に配置されており、有用な知識普及協会が刊行した図と同様に、ケンペルとクルーゼンシュテルンの名前を記している。他方はプロイセンの東アジア遠征の記録の第 1 巻で、前半は日本の概説、後半は 1860 年 8 月からの日記になっている（Anonymous 1864）。日本図は巻末に配置され、円錐図法で描かれているが、海岸線などのトレースが粗雑である。こうした書物の付図は、今後探索すればはるかに多くの例が見つかると思われる。

このような普及状況からみれば、クルーゼンシュテルンの「日本帝国図」が英国海図の 2347 号「日本：本州・九州・四国・朝鮮海岸の一部」（1855 年刊）の元図に採用されたのは（小林ほか編 2019: 44, 70-71）、遅すぎるようにみえるが、この刊行はむしろアメリカのペリー艦隊の遠征により、日本が開国に向けて大きく変化し始めたことに合わせてのことと思われる。図のタイトルの下にクルーゼンシュテルンの 1827 年刊の海図（「日本帝国図」）によると明記しつつも、つづく注記が示すように、いくつも修正を受けていた。まず太平洋岸の伊良子岬～相模岬（三浦三崎）までは後述するシーボルトが 1840 年に刊行した「日本人作成による原図および天文観測による日本国地図」によるとする。また津軽海峡、佐渡、能登半島、隠岐、五島列島についてはサラセン号によるリチャーズの 1855 年の測量成果（Pascoe 1972: 356）を採用し

ている。とくに佐渡についてはその「日本帝国図」にみえるものを写しているものの、それよりかなり南になるとことを示している（図 7）。



図 7 : Japan: Nipon, Kiusiu, and Sikok, and a part of the coast of Korea. British Admiralty Chart, No. 2347. (英国海図 2347 号「日本：本州・九州・四国・朝鮮海岸の一部」) 81.9×102.7cm, 1855 年, アメリカ議会図書館蔵 (LCCN: 2015-588080), 佐渡と新潟付近の海岸をトリミングしている。

さらに 1862 年にはその改訂版が刊行された（海図番号はやはり 2347 号で山口県文書館蔵図による [小林ほか編 2019:43,70-71]）。この図では、1855 年図に描かれた「日本帝国図」を引き継ぐ佐渡が消去されている。また江戸湾に測深データが書きこまれているのは、アロー戦争時に中国に來航した測量艦アクタイオン号が日本にも足をのばしており、その測量によるものであろう。

なおこのアクタイオン号來航時には、英国公使オールコックは幕府と長崎から函館までの海岸測量について交渉を行い、これにあたる英国船は日本の国旗を掲げるとともに幕府の役人を乗船させることとした。このとりきめによってアクタイオン号に乗り込んできた幕府の役人

は伊能図を持参しており、その精度が高いことに気づいた同号の測量技術者は、同図の提供を幕府に要求するようオールコックに求め、その交渉によって、これを入手することに成功した（Pascoe 1972: 357-358; Kobayashi 2015: 487-488）。

よく知られている伊能図の英国海図への反映は、これをうけたものである。長久保赤水図の系譜をひくクルーゼンシュテルンの「日本帝国図」を元図として際した場合と同様、この場合でも英国水路部は伊能図を無条件で採用したわけではなかった。1863 年に刊行された 2347 号海図「日本：本州・九州・四国・朝鮮海岸の一部に関する予備的海図」のタイトルの下に注記では、日本列島については、「日本政府の地図」によるとしながらも、1855 年のリチャーズと、1861 年のウォード（John Ward, 1825-1896、アクタイオン号艦長）の決定した位置に合わせていると明記されている（山口県文書館蔵図による [小林ほか編 2019: 47, 72-73]）。

ここで「日本政府の地図」というのは、幕府が英国に提供した伊能小図にあたり、すでに日本側の研究者が英国で調査を重ねており（星埜 2005; 八島・鈴木 2018）、またその英国海図への反映についても検討がある（保柳 1970; 八島 2020）。この図の漢字で書かれた地名のうち、一部にアルファベットの音訳が示されているが、難読のものについては誤りがみとめられることも指摘されている。またこの誤りは、当然のことながら英国海図にも反映している。この音訳がどのように行われたかは、すでに示した長久保赤水日本図の地名の場合と同様、興味深い問題であるが、まだ検討されていないようである。また、海図作製に際し、この伊能図の記載内容をどのように英国側が評価し、修正したかについても十分な検討がされているとはいえない。

他方、Pye and Beasley (1951) は、この伊能の図と 1863 年刊の 2347 号図を比較して、Hoyanagi (1967) がのちに詳しく検討するような、伊能図における東北日本の経度表示の問題（高緯度になるほど東側へのズレが大きくなる）があることを指摘した。また Pascoe (1972: 358) では、1861 年にアクタイオン号が測量できなかった空白域について、伊能図がフルに採用されたとしている。これらは、大きな修正を施された部分は英国側に対照できるデータがあったことを示しており、東北日本の経度表示の

修正もそのようなかたちで行われたことを示唆する。

保柳（1974: 224）は、こうした修正について明示的でない英国海図について、「かえって奥ゆかしさを感じるくらいである」と述べているが、伊能図の独特の経度表示（菱山 2017; 2020 を参照）を西欧側の測量データによりつつメルカトール図法に変更する作業のなかで、この修正が行われたことを考慮すべきであろう。したがって、2347 号英国海図（1863 年刊）作製における伊能図の利用過程については、なお検討すべきことが残されている。伊能図の投影法について検討が進んできた現在（菱山 2020）、英国水路部の伊能図の取扱について、理解が深まる可能性が大きい。

他方、英国海図における伊能図の修正・利用は、英国船、さらには日本船による沿岸測量の進展とともに減退することになり、早くも 1876 年刊行の英国海図 2347 号では、日本政府の地図から編集したという注記がなくなってしまう（小林ほか編 2019: 72-73）。

このようにみえてくると、ヨーロッパ側の海図では、地理情報が不足している時には日本製の地図を利用するが、それが意義を持つのは、時代が下がるほど短期間となり、新しい精度の高い図の登場や本格測量による地理情報の充実が進行するとともに、その利用が消えるように終了してしまうことがわかる。長久保赤水日本図、さらに伊能図は、このような西欧側の日本沿岸調査に合わせるようにして注目され、継起的に利用されたわけである。

ところで伊能図はこれに先んじてシーボルトによってヨーロッパにもたらされていたことはよく知られている。有名なシーボルト事件がこれに関与するが、ただしシーボルトは、日本の地理情報の公開については、日本での情報提供者に幕府の弾圧がおよばないようにすることをつよく意識し、意識的に遅らせていたことも重要である。高橋景保の「日本邊界略圖」（1809 年刊）をヨーロッパで刊行したのは 1832 年で、伊能図による「日本人による原図ならびに天文学的観測に基づく日本国図」に至っては 1840 年となる（海野 1979）。

「日本邊界略圖」は、すでに触れたような高橋らの北方域に関する研究を集成するとともに、伊能忠敬に急遽作らせた本州以南の図（「日本輿地図藁」）（保柳 1972）も組み込んで、北東アジアを図示したもので、「新訂萬国全圖」とともに刊行された。円錐図法で描かれているが、

シーボルトが流布したものはその経緯線をほとんど消去したもので、京都を通過する経線（高橋らの本初子午線）だけを残している。この形での図がシーボルトの著書のフランス語版、英語版、ロシア語版によって各国に広まったという。

他方伊能図による日本図について、シーボルトは元図にみられる経緯線を残しつつ、メルカトール図法に描きかえている。この場合経線は、京都を通過するものを本初子午線としているが、図郭の上下にグリニッジを規準とする経度も記入する。この図法の変換は、海図の規準に合わせるものであったと考えられるが、やはりどのように行われたかについては、あまり検討されていないようである。また蘆田・箭内（1938: 435-438）に指摘された、シーボルト日本図の特異的な問題点（正保日本図によると思われる若狭小浜湾の海岸線、伊豆半島の形状、房総半島の先端、樺海、阿賀野川河口、大和川の流路）も留意されるところである。

シーボルト日本図を元図にする図の例としては、アメリカで刊行された Colton 社の世界地図帳（1856 年刊）に収録された「日本：本州・九州・四国・蝦夷そして日本領千島」（Japan: Nippon, Kiusiu, Sikok, Yesso and the Japanese Kurils）が挙げられている（鈴木 2018）。この図では京都中心の経線は消去され、グリニッジを規準とする経線が記入されている（アメリカ議会図書館所蔵図 [LCCN: 2004629150]、ただし 1855 年刊による）。これから伊能図の経度表示の問題をよく理解することができる。円錐図法によるが、東北地方の両側にひかれた東経 140 度と 142 度の経線の位置を、現代の地図に掲載されているものと比較すると、上記のような東側へのズレの大きさがわかる。

なおこの図では、下部にシーボルトの図ならびにアメリカの日本遠征の際の偵察によると注記しているだけでなく、上記のシーボルト図に特異的な問題点も樺海と阿賀野川河口を除き認められる。

この図の刊行は、上記の注記からわかるように、ペリー艦隊の報告書第 1 巻のメルカトール図法による折り込み日本図（Perry 1856: 242）と密接な関係を持ちつつ行われたものと推定される。この折り込み図の注記でもシーボルト図によって作ったとし、アメリカの日本遠征隊および関係機関によるわずかな加筆と訂正を施している

する。また上記の特異点は、この折り込み図でも房総半島先端の形を除いてほぼみとめられる。

ただし、Colton 図とこの折り込み図にあらわれた蝦夷（Colton 図では左上の小図に示す）は、形が大きく違っている。前者の蝦夷はあきらかにシーボルトの「蝦夷と日本領千島地図」によるが（シーボルト 1978、付図所収）、後者は襟裳岬の位置を前者にみえるものよりも北西方向に大きく移している。「蝦夷と日本領千島地図」が高橋作左衛門（景保）の原図によるとされているとおり、日本側の作製であるのに対し、折り込み図はブロートン、さらにクルーゼンシュテルンにしたがって襟裳岬の位置を変えて海岸線を修正した可能性があり、さらに検討を要する。そこでは日本人の成果よりもヨーロッパ人の近代測量による成果を優先されているようにみえるわけである。

ともあれ、このようにシーボルト日本図を元図にする図が作製されたのは、アメリカの日本遠征に際して彼の日本研究が重視されていたからでもあろう。この遠征には、シーボルト本人も参加を申し出ていたようであるが、ペリーはそれを拒否している（Perry 1856: 79）。シーボルト事件を考慮したのであろう。

あきらかにシーボルト日本図の系譜をひくことがわかっている例はこれらの図以前には少なく、それが刊行された 1840 年以後、あまり流布しなかったことをうかがわせる。ただしクルーゼンシュテルンの「日本帝国図」を元図にする英国海図 2347 号（1855 年刊）のように、部分的にシーボルトの図を援用する場合もあり、英国水路部はシーボルト系の日本図を全く参照しなかったというわけではない。なぜ 1855 年の段階で、英国水路部が主な元図としてクルーゼンシュテルンのものを採用したかについては、さらに検討を要するが、その際にもヨーロッパ側の近代測量の成果を優先させた可能性が大きい。なお、シーボルトの系譜をひくコルトン社の日本図ならびにペリー艦隊報告の折り込日本図は、以後アメリカで刊行のアトラスの日本図に転用されていくようであるが、これについては今後の課題としておきたい。

ところで伊能図は、幕末期になって「官板実測日本地図」として刊行される。これが外国人にどのように受け止められたかという点については、ドベルグ（1987）以後あまり議論されていないが、最近では明治以後の刊行

図におけるその役割がわかってきている（井田 2018; 2019）。「官板実測日本地図」の記載内容が限られていたため、それだけを元図にする日本図は成り立たず、国内で作られた地方図を参照するのは、それ以外の方法がなかったと考えるべきであろう。また外国人が使う場合、とくに地名の取り扱いには日本人の助力が必要であったと考えられる。関連してこの時期の在留外国人作製図における地名表記が気にかかるが、井田（2019）が検討したクニッピングの図（ただしフランス国立図書館所蔵図 [FRBNF40729126] の公開画像を参照した）や金坂（1998a,b）が紹介するブランソンの図いずれでも難読地名の一部について誤りが認められ、地名の音訳の問題が継続していたことがわかる。

以上、伊能図を元図にする日本図の欧米への普及について検討した。伊能図の海外への流出は、シーボルトによるものが早い、それにもとづく日本図の刊行は 1840 年と遅く、ヨーロッパではすでにクルーゼンシュテルンの『太平洋アトラス』所載図による日本図が広く出回っており、それに取って代わることはできなかったと推定される。ただしアメリカでは、ペリーの遠征に関連してシーボルト日本図が知られるようになり、一般向けのアトラスに採用された。他方、英国海図 2347 号（1863 年刊）およびその後継図を元図にする日本図も遅れて登場したようであるが、これについても今後の課題としたい。

6. むすびにかえて

これまで鎖国時代以後のヨーロッパにおける日本図の利用を地図学史の観点から検討してきた。日本人の海外渡航が禁止され、ヨーロッパからの来航がオランダ船に限られるようになって、日本情報の海外への流出が限定されたことは、ヨーロッパで作製された日本図にも反映し、国内で作製された日本図のうち少数のものが導入されて、くりかえし印刷されることになった。またこうして印刷された日本図は、実用的なものというより、異国趣味を楽しむための観賞用のものであった。

しかし 18 世紀末になってヨーロッパの探検船が到来し、またラクスマンやレザノフが代表を務める使節団が到来するとにつれて、日本の地図情報は長崎のオランダ商館以外のルートでも海外に流出するようになった。ロ

シア・ルートでもいうべきもので、松前藩の加藤肩吾を通じたものだけでなく、「文化露寇」のような掠奪、さらに漂流民を通じたと考えられる『三国通覽圖説』の流出も発生した。また長崎のオランダ商館からも、ティツィングを通じて基本的な地理情報が流出した。それは地名情報もともない、単なる日本製図の持ち出しを超えるものであった。

この背景には長久保赤水の「改正日本輿地路程全圖」の刊行があり、それは緯線とそれに直行する南北線ともなっていて、ヨーロッパ製の地図に近いものとして受け取られた。そこに示された多数の地名についても、ティツィングの成果を本格的に利用する準備が整っていった。とくにイルクーツクにおける新蔵とクラブロートの出会いによって得られた日本の用字法に関する理解を元に、クラブロートはティツィング収集の地名の音訳を校訂するだけでなく、『三国通覽圖説』の翻訳などを手がけることとなった。クルーゼンシュテルンの長久保赤水日本図を利用した「日本帝国図」作製が、これらの努力を集成するような形で行われたことも注目される。

のちに長崎オランダ商館で活動したシーボルトも含めて、これらの関係者は緩く結ばれたネットワークを作っており、探検航海による地理情報をつまみ取る雑誌にもその成果が掲載されて流通した。また航海記の翻訳がヨーロッパの主要言語で刊行されたことも無視できない。これに関連して指摘しておかねばならないのは、19 世紀初頭の日本は、レザノフが幕府に贈ったロシア図（鮎澤 1952 など）やレザノフ使節団の一部がオランダ通詞、本木庄左衛門正栄に渡したアロースミスの世界図（海野 1977 など）、さらにオランダ語訳の航海記も通じてこのネットワークにつながっていたことである。クルーゼンシュテルンの航海記の翻訳『奉使日本紀行』についてはすでに触れたが、「文化露寇」に関連して日本側に捕らえられたゴロヴニンの今日『日本幽囚記』として知られている書物も「遭厄日本記事」として 1825 年に翻訳されて（井上 1943: 24-25）、ヨーロッパ側の日本認識が追跡されていたのである。

以上が、近世の日本製図のヨーロッパでの利用について本稿の検討からえられた展望であり、結論となる。とくに 18 世紀末以降の展開については、最近筆者らの研究によって判明した知見を加えるとともに、それをふま

えた新視点から幕末期までの流れを整理した。以下では、さらに関連する問題について触れておきたい。

まず以上の検討から、地図情報の収集や集成が当時はまだ個人の努力に支えられていたことがわかる。今日からすると驚きを感じられるが、ヨーロッパでは国家的な地図（海図）作製機関がまだ確立途上にあったこと（Webb 2010: 192-227）を考慮すべきであろう。

ただし他方で、ヨーロッパで日本と唯一国交をもち日本情報を独占的に入手できたはずのオランダの役割が大きくないことも留意される。オランダは毎年日本に船を派遣し、バタビアから長崎への航路についてはかなりの情報を蓄積していたと考えられるが、それは公開されなかったとされている。フランスのラペルーズはつぎのように述べている。

バタヴィアを出港する際に、（オランダの）艦長たちは航海の詳細について口外しない、そして、航海に使う手書きの海図は何人にも複製させないと、宣誓しなければならないのだと私は聞かされた。・・・（ラペルーズ 2006: 337、括弧内は筆者）

オランダ東インド会社は、海図の印刷公開どころか複製を許さず、口頭での情報流出も許さなかったわけである。このようなオランダの地図情報に対する態度は、東インド会社の解散後でもさらに広く感じられており、上記のゴロヴニンはつぎのように書いている。

長崎で交易を行っているオランダ人は、住民との接触上あらゆる制限を受けているとは云え、日本語を知っているのも、この国について珍しい情報をおびただしく集めていることは疑いを入れない。しかしオランダ人は周知の通り、他のヨーロッパ人が行って大いに認識を得、かつその観察を微に入り細に互って全世界に報道しているが如き日本以外の諸地方の記述や地図をさえ秘密に附しているのも、あらゆるヨーロッパ人中彼等のみが入国を許された日本について何をオランダ人に期待できよう。・・・（ゴロヴニン 1943: 65、仮名づかい、漢字を改めた [筆者]）

こうした指摘がオランダ側の秘密主義だけによるのか、

あるいは日本側の規制も少なからぬ意義をもっているのかは興味深い問題であるが、ともあれ日本から漏れるように流出した地図情報は貴重なものとして受け止められ、取捨選択の上、集成されたわけである。

これに関連して注目されるのは、流出した地図情報の多くは刊行され、市場で販売された木版地図であったが、一部に手書きのものもあったことにくわえ、流出そのものについても多様な態度がみられることであろう。松前藩の加藤肩吾のラクスマンやブロートンとの地図情報の交換と中川五郎次の掠奪された地図情報の焼却の間には大きな落差がある。後者は「文化魯寇」の戦時状態を考慮する必要があるが、五郎次の個人的判断によると考えられるとはいえ、木版の地図・絵図までロシア側に渡さないようにしている。また長崎オランダ商館に滞在したケンペル、ツェンベリー、ティツィング、シーボルトと持ち出した地図には大きな違いがあり、とくにティツィング以後は規制が緩和されたように思われる。よく議論されるシーボルトの伊能図の持ち出しについては、幕府作製の秘図で、しかも手書きであった。

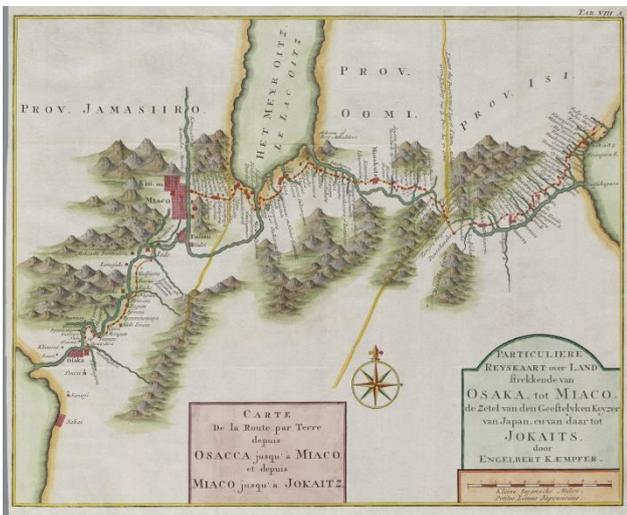


図 8 : Particuliere Reyskaart over Land strekkende van Osaka, tot Miaco, de Zetel van den Geestelyken Keyzer van Japan, en van daar tot Jokaits, door Engelbert Kaempfer (Carte de la route par terre depuis Osacca jusqu'à Miaco et depuis Miaco jusqu'à Jokaitz) (ケンペル「大坂から日本の精神的皇帝の座す都まで、またそこから四日市までの陸路特別旅行図」, 30×37cm, 1740 年(ただしワルター編 1993: 203 による), オランダの古地図研究家, Captain Hans D. Kok よりいただいた画像による。

またこのように検討を進めていくと、江戸参府の際のケンペルのコンパスによる測量(小林ほか編 2019: 52)やシーボルトのクロノメーターを使用した経緯度観測(石山 2002)も視野に入れる必要を感じる。とくにケンペルの測量成果は、『日本史』に掲載されるだけでなく、別に色刷りの大きなものが流布しており(ワルター編 1993: 160-161)(図 8)、日本の地理に少しでもアプローチしたいという意欲とともに、それが広く鑑賞されたことがうかがえる。彼らは日本側の規制を考慮しつつも、最大限の地理情報の収集に努めていたわけである。

このように見てくると、日本の地図情報のヨーロッパにおける受容は、日本製図の複製をこえて、さらに広い枠組みのなかで再考される必要性を感じる。本稿で示すことができたのは、地図情報の流れの概要にすぎないことが明らかである。また筆者の視野に入らない流れはほかにもあった可能性を考えると、さらに調査が必要である。

【謝辞】

本稿ができるまでに多くの方のお世話になった。とくに参照した地図の閲覧に際してはアメリカ議会図書館(The Library of Congress)、大英図書館(The British Library)、フランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)、オランダ王立図書館(Koninklijke Bibliotheek)、ライデン大学図書館(Leiden University Library)、山口県文書館、近畿大学中央図書館、茨城県古河市の古河歴史博物館、大阪大学総合図書館にはさまざまな便宜を供与していただいた。またエストニア国立文書館(Rahvusarhiiv on Eesti)には公開画像の利用の方法についてお知らせいただいた。本稿のもとになったのは、上記古河歴史博物館で 2019 年 7-9 月に国際地図学会にあわせて開催した「鎖国時代 海を渡った日本図」展(日本地図学会後援)で、とくに同館の永用俊彦氏との討論は有用であった。またアメリカ議会図書館地理・地図部のミーンズ節子さん、大英図書館日本部の Mr. Hamish Todd ならびに大塚靖代さんには閲覧に際しとくに御世話をいただいた。なお、本研究では JSPS 科研費(基盤研究(A): 24240115; 同(B): 16H03527)ならびに 2019 年度大阪観光大学ブランディング研究事業予算を使用した。ここに記して感謝申し上げたい。

なお本稿は 2020 年度日本地理学会春期学術大会で発表した内容(鳴海邦匡・小林茂「近世日本で作成された絵図のヨーロッパにおける利用」[発表番号 835]、ただし新型コロナウイルス流行のため、口頭での討論なし)の骨子を展開し、論述したものである。

【引用・参考文献】

- 青山宏夫 2013.「マテオ=リッチ世界図と近世日本」2013年人文地理学会大会研究発表要旨, 12-15.
- 青山宏夫 2018.「シーボルトが手に入れた日本図と日本の地理情報」地図(日本地図学会) 56(1): 24-39.
- 秋月俊幸 1996.「日本北辺地図にみる東西の接触: 欧州の航海者たちが利用した松前藩の『蝦夷地図』」北海道・東北史研究会編『メナシの世界』北海道出版センター, 44-76.
- 秋月俊幸 1997.「日本北辺の地図史から見た初期の日露関係」ロシア研究 25: 56-72.
- 秋月俊幸 1999.『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会.
- 蘆田伊人 1930a.「樺太島の地図學史上に於ける或考察」史苑 48(6): 347-366.
- 蘆田伊人 1930b.「西欧最初出版の日本地圖に就いての或る考察」歴史地理 56(4):18-48 および口絵写真.
- 蘆田伊人・箭内健次 1938.「シーボルト作成の地図」日獨文化協會編『シーボルト研究』岩波書店, 427-780.
- 鮎澤信太郎 1952.「幕末ロシア使節の将来した地図とその日本への影響」財団法人開国百年記念文化事業会編『開国百年記念明治文化史論集』乾元社, 419-449.
- 鮎澤信太郎 1962.「ロシア使節レザノフの将来した地図」日本歴史 173: 75-78.
- 石山禎一 2002.「シーボルト自筆『一八二六年江戸参府の途上クロノメーターによる緯度・経度の観測値』について」片桐一男編『日蘭交流史、その人物・情報』思文閣出版, 228-246.
- 井田浩三 2018.「伊能図を元にした海外版刊行図」地図(日本地図学会) 56(1): 40-49.
- 井田浩三 2019.「クニッピング作製の”日本図”考察」地図(日本地図学会) 57(1): 1-16.
- 井上満 1943.「解説」ゴロヴニン著・井上満訳『日本幽囚記上』岩波書店(岩波文庫), 3-25.
- 岩井憲幸 2000.「新出の大黒屋光太夫筆日本図について」明治大学教養論集 328: 101-128.
- 上杉和央 2007.「日本図の出版」京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編『地図出版の四百年』ナカニシヤ出版, 33-67.
- 上原久・小野文雄 1969.「高橋景保の書簡について」埼玉大学紀要人文科学篇 17: 1-29.
- 海野一隆 1977.「漂流民津太夫らの帰国と地図の伝来」有坂有道編『日本洋学史の研究VI』創元社, 101-122. (海野『東西地図文化交渉史研究』清文堂, 535-553 に再録)
- 海野一隆 1979.「シーボルトと日本境界図」有坂隆道編『日本洋学史の研究V』創元社, 101-128
- 海野一隆 1985a.『ちづのしわ』雄松堂出版
- 海野一隆 1985b.「西洋製初期日本図の系統分類」石田寛編『外国人による日本地域研究の軌跡』古今書院, 105-123. (海野『東西地図文化交渉史研究』清文堂, 653-671 に再録)
- 海野一隆 2003.『東西地図文化交渉史研究』清文堂.
- 小野寺淳・小田匡保・野積正吉・川村博忠編 2016.『シーボルトが日本で集めた図』古今書院.
- 海田俊一 2017.『流宣図と赤水図: 江戸時代のベストセラー日本地図』アルス・メディカ.
- 海田俊一 2019.『図説総覧、江戸時代に刊行された世界地図』アルス・メディカ.
- 金坂清則 1998a.「R.H.ブランドン編の日本図 Nippon [Japan] をめぐって」地図(日本国際地図学会) 36(3): 12-31.
- 金坂清則 1998b.「ブランドン日本図 Nippon [Japan] の表現内容とベースマップに関する考察」地図(日本国際地図学会) 36(4): 24-39.
- 亀井高孝 1967.『光太夫の悲恋: 大黒屋光太夫の研究』吉川弘文館.
- 川村博忠 2003.『近世日本の世界像』ペリカン社.
- 川村博忠 2010.『江戸幕府の日本地図: 国絵図・城絵図・日本図』吉川弘文館.
- 木崎良平 1992.『光太夫とラクスマン: 幕末日露交渉史の側面』刀水書房.
- クルーゼンシュテルン著・青地盈訳・高橋景保校 1979.『奉使日本紀行』叢文社.
- 古賀慎也 2008.「ケンペルが持ち帰った『万国総界図』: 『万国総界図』がヨーロッパ学界に与えた影響」九州大学総合博物館研究報告 6: 33-80.
- 古賀慎也 2009.「ケンペルの世界図とヨーロッパの地理学」宮崎克則ほか編『ケンペルやシーボルトたちが見た九州、そしてニッポン』海鳥社, 164-171.
- コーニツキー 2018.『海を渡った日本書籍』平凡社.
- 小林茂 2020.「鷹見泉石収集のオランダ製海図アトラスの成立事情と構成」泉石(古河歴史博物館) 14:1-31
- 小林茂 2021.「新蔵と善六の長久保赤水日本図の露訳について」ナジェーグダ(石巻若宮丸漂流民の会) 45: 2-10.
- 小林茂・永用俊彦・鳴海邦匡・臼井公宏・小野寺淳・立石尚之編 2019.『鎖国時代 海を渡った日本図』大阪大学出版会.
- 小林茂・鳴海邦匡 2018.「ヨーロッパにおける長久保赤水の日本図の受容過程」地図 56(4):1-17.
- ゴロヴニン著・井上満訳 1943.『日本幽囚記上』岩波書店(岩波文庫).
- 佐藤淳二 2006.「解説: ラペルーズあるいは『啓蒙』の大航海者」ラペルーズ著・佐藤淳二訳 2006.『太平洋航海記、上』岩波書

- 店, 249-257.
- シーボルト著、中井晶夫・八城園衛訳 1978『シーボルト「日本」』
図録第 1 巻. 雄松堂書店.
- 鈴木純子 2018. 「伊能図利用の軌跡」地図（日本地図学会 56(1):
9-23.
- 高橋正 1985. 「西漸せる初期日本地図について：I. Moreira 系地
図を中心として」日本学報 4: 1-33.
- 高橋正 1987. 「17 世紀日本地図におけるテイシェイラ型とモレ
イラ型：N.サンソンと R.ダッドレーの場合」日本学報 6: 111-
135.
- ツェンペリー、C.P.著・高橋文訳 1994. 『江戸参府随記』平
凡社（東洋文庫 583）.
- ドベルグ美那子 1987. 「P.ムリエの日本地図手写本:フランス語
訳「官板実測日本地図」」有坂隆道編『日本洋学史の研究VIII』
創元社, 35-65.
- ドベルグ美那子 1989. 「仏訳『三国通覧図説』をめぐる諸問題」
有坂隆道編『日本洋学史の研究IX』創元社, 37-80.
- 永積洋子 1998. 『18 世紀の蘭書注文とその流布』平成 7 年度～
平成 9 年度科学研究費補助金<基盤研究(B)>研究政科報告
書.
- 中村拓 1966. 『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図I、II』東洋文庫.
中村拓 1967. 『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図III』東洋文庫.
中村拓 1968. 「赤水図の欧州における評価」地理 13(1): 85-91.
二宮陸雄 2007. 『高橋景保と「新訂万国全図」：新発見のアロウ
スミス方図』北海道出版企画センター.
- ハバード、ジェイソン C. 著・日暮雅通訳 2018. 『世界の中の
日本地図：16 世紀から 18 世紀西洋の地図にみる日本』柏書
房.
- 菱山剛秀 2017. 「地図投影法からみる伊能図」地図情報 37(3): 8-
11.
- 菱山剛秀 2020. 「伊能図の投影に関する疑問」地学雑誌 129(2):
303-314.
- 藤井祐介 2009. 「日本図の変遷とケンペル・伊能・シーボルト」
宮崎克則ほか編『ケンペルやシーボルトたちが見た九州、そ
してにっぽん』海鳥社, 172-181.
- 船越昭生 1976. 『北方図の歴史』講談社.
- 船越昭生 1979. 『「新訂万国全図」の主要史料アロウスマスの原
図について』史林 62(1): 1-46.
- 船越昭生 1986. 『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学的研究』
法政大学出版会.
- 船越昭生 1992. 『「新訂万国全図」(第 1 次手書本)の成立』奈良
女子大学地理学研究報告IV, 1-64.
- 船越昭生 1996. 「こだまする地図：ライデン大学図書館シーボル
ト・コレクションの二図から」史窓 53: 39-64+付図 7.
- 星埜由尚 2005. 「伊能小図を訪ねて」伊能忠敬研究 42: 4-7.
- 保柳睦美 1970. 「伊能図に基づいたイギリス製日本沿海図」地学
雑誌 79(4): 30-42.
- 保柳睦美 1972. 「高橋景保・伊能忠敬編「日本輿地図藁」考」地学
雑誌 81(3): 131-141.
- 保柳睦美 1974. 「伊能図に基づいたイギリス製日本沿海図：伊能
図と世界諸図(2)」保柳編『伊能忠敬の科学的業績』古今書院,
205-222.
- 松浦茂 2012. 「高橋景保『北夷交渉』の成立と北方地理学の進展」
アジア史学論集（京都大学人間・環境学研究所）5: 19-40.
- 三好唯義 1989. 「いわゆる流宣日本図について」地図 27(3): 1-9.
三好唯義・小野田一幸 2004. 『図説日本古地図コレクション』河
出書房新社.
- 村山七郎 1967. 「加藤肩吾『魯西亜実記』（魯西亜紀聞）の文献
学的研究」順天堂大学体育学部紀要 10: 129-157.
- 村山七郎 1968. 「ラクスマン使節持参の図書と手紙」日本歴史
241:84-90.
- 室賀信夫 1972. 「新訂万国全図の一資料アロウスマスの世界図
について」人文地理 24(1): 122-124.
- 八島邦夫 2020. 「伊能図の海図への利用：日本の正しい形・位置
を世界に伝えた英国海図を中心に」地学雑誌 129(2): 195-213.
- 八島邦夫・鈴木純子 2018. 「現存する（最終本）伊能小図をめぐ
って：英国伊能小図についての新知見を中心に」地図（日本
地図学会）56(1): 51-58
- 吉田厚子 2009. 「ロシア使節レザノフの将来した『ロシア全図』
の原図・訳図の研究」東海大学総合教育センター紀要 29: 37-
57.
- ラペルーズ著・佐藤淳二訳 2006. 『太平洋航海記、下』岩波書店.
レザノフ著・大島幹雄訳 2000. 『日本滞在記』岩波書店（岩波
文庫）.
- ワルター、ルッツ編 1993. 『西洋人の描いた日本地図：ジバング
からシーボルトまで』社団法人 OAG・ドイツ東洋文化研究協
会.
- Abel-Rémusat, 1817. Description d'un groupe d'îles peu connu et
situé entre Japon et les îles Mariannes, redigée d'après les relations
des Japonais. *Journal des Savans*, Juillet, 1817, 387-396.
- Anonymous 1894. *Die preussische Expedition nach Ost-Asien, Erster
Band*. Verlg der königlichen Geheimen Ober-hofbuchdruckerei.
- Basil Hall 1818. *Account of a Voyage of Discovery to the West coast
of Corea and the Great Loo-Choo Island*. Abraham Small.
- Broughton, W.R. 1804. *A Voyage to the North Pacific Ocean*. T. Cadell
and W. Davies.
- Brown, Y.-Y. 1993. Engelbert Kaempfer's legacy in the British
Library. Haberland, D. (ed.) *Engelbert Kaempfer-Werk und*

- Wirkung*. Franz Steiner, 344-360.
- Campbell, T. 1967. *Japan: European Printed Maps to 1800*. The Map Collectors'Circle.
- Dahlgren, W.W. 1911. *Les débuts de la cartographie du Japon*. Appelbergs (Archives d'études orientales v. 4).
- Hamilton, A. 1998. From a "closet at Utrecht": Adriaan Reland and Islam. *Nederlands archief voor kerkgeschiedenis/ Dutch Review of Church History* 78(2): 243-250.
- Hayes, D. 2001. *Historical Atlas of the North Pacific Ocean*. British Museum Press.
- Hoyanagi, M. 1967. Re-appreciation of Ino's maps, the first maps of Japan based on actual survey. *Geographical Report of Tokyo Metropolitan University* 2: 147-162.
- Hubbard, J.C. 2012. *Japoniae Insvlae, the Mapping of Japan*. Hes & De Graaf Publishers BV.
- Ishida, M. 1938. A brief note on the two European maps of Japan recently discovered (A woodcut map of 1586 and a manuscript map of 1585). *Monumenta Nipponica* 1(1): 259-265.
- Kaempfer, E. (Translated by J.G.Scheuchzer) 1727. *The History of Japan*. London.
- Klaproth, J. 1824. Description des îles Lieou-Khieou extradite de plusieurs ouvrages chinois et japonais. *Nouvelles Annales des Voyages* 21: 289-316.
- Klaproth, J. 1825. Description des îles Mou nin sima, C'est-à-dire des îles inhabitées, traduite de l'ouvrage japonais intitulé Sa kokf tsu ran, imprimé à Yedo en 1875. *Journal Asiatique*, Tome 7, 243-250.
- Klaproth, H.J. 1828. Notice d'une Mappemonde Japonaise conservée dans le Musée Britannique à Londres. *Mémoires relatifs à Asie* Tome 3: 471-481.
- Klaproth, H.J. 1829. Sur l'introduction de l'usage des caractères chinois au Japon, et sur l'origine de différents syllabaires japonais. *Nouveau Journal Asiatique*, Tome III, 19-48.
- Klaproth, H.J. 1932. *San Kokf Tsou Ran To Sets ou Aperçu général des trois royaumes*. The Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland.
- Klaproth, H.J. 1834. Préface. Titsing, Isaac (traducteur) *Nippon O Dai Itsi Ran ou Annales des Empereurs du Japon*. The Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, i-viii.
- Kobayashi, S. 2015. Imperial cartography in East Asia from the late 18th century to the early 20th century: An overview. *Japanese Journal of Human Geography* 67(6): 480-502.
- Krusenstern, A.J. von 1813. *Voyage round the World*. John Murray.
- Krusenstern, A.J. von 1827. *Recueil de mémoires hydrographiques pour servir d'analyse et d'explication à l'Atlas de l'Océan Pacifique*, la seconde partie. L'Imprimerie du Département de l'instruction publique.
- Lequin, F. 2003. *A la recherche du Cabinet Titsingh: Its History, Contents and Dispersal*. Canaletto.
- Nakamura, H. 1939. Les cartes du Japon qui servaient de modèle aux cartographies européennes au début des relations de l'Occident avec le Japon. *Monumenta Nipponica* 2(1): 100-123.
- Narumi, K. and Kobayashi, S. 2019. The use of Japanese early modern maps by Western cartographers during the nineteenth century. Storms, M. et al. (eds.) *Mapping Asia: Cartographic Encounters between East and West*. Springer International, 169-183.
- Pascoe, L.N. 1972. The British contribution to the hydrographic survey and charting of Japan 1854-1883. Shoji, D. (ed.) *Researches in Hydrography and Oceanography: in Commemoration of the Centenary of the Hydrographic Department of Japan*, Nihon Suiko Kyokai, 355-386.
- Perry, M.C. 1856. *Narrative of the Expedition of American Squadron to China Seas and Japan*. The Congress of the United States.
- Postnikov, A.V. 2000. Outline of the history of Russian cartography. *Regions: A Prism to View the Slavic-Eurasian World towards a Discipline of "Regionology"*. Slavic Research Center, Hokkaido University, 1-49.
- Pye, N. and Beasley, W.G. 1951. An undescribed manuscript copy of Ino Chukei's map of Japan. *Geographical Journal* 117(2): 178-187.
- Rundall, T. 1963. *Memorials of the Empire of Japan: in the XVI and XVII Centuries*. B. Franklin.
- Teleki, P.G. 1909. *Atlas zur Geschichte der Kartographie der japanischen Inseln*. K.W. Hiersemann.
- Walter, L. (ed.) 1993. *Japan: A Cartographic Vision*. Prestel.
- Walter, L. (ed.) 1994. *Japan mit den Augen des Westens Gesehen*. Prestel.
- Webb, A. 2010. *The Expansion of British Naval Hydrographic Administration 1808-1829*. Doctoral Dissertation of the University of Exeter.
- Yonemoto, M. 2016. European career of Ishikawa Ryusen's map of Japan. Wigen, K., Sugimoto, F. and Karakas C. eds. *Cartographic Japan*. University of Chicago Press, 37-40.